

伯 太 北 遺 跡

都市計画道路池上下宮線建設に伴う発掘調査報告書

2 0 0 1 . 3

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

大阪府南西部にあたる泉州地域は、関西国際空港の建設に関連して道路網整備が積極的に推進されてきた。その一環として、和泉市内でも池上町から横山までをつなぐ道路として都市計画道路池上下宮線が具体化した。そのルート上の西端約4.5kmの区間では1987年と1991年に、埋蔵文化財の残存状況の確認のため都合14ヶ所の試掘調査を実施した。その結果、遺物包含層が認められた範囲において、1992・93年度に全面調査を実施するにいたった。今回、報告する伯太北遺跡がその発掘対象地にあたる。調査地は、JR阪和線信太山駅の南東側の住宅密集地から信太山丘陵の西斜面に位置する。このような、地形の変換点にあたる付近において、遺跡が形成されていた。

今回の発掘の結果では、古墳時代後期と古代～中世の集落の一端があらためて明らかになり、さらには、それらをさかのぼる時期の遺物や、周辺に古墳が存在した事実を示唆する埴輪の出土も確認できた。遺構・遺物ともに、決して夥しい検出量ではなかったものの、この地域の過去において展開されたその場所々々の個性ある歴史を、現在の考古学的な手法を駆使して明らかにできた意義は大きい。そのような個別の成果を地道に集積してはじめて、各地域の偽らざる歴史を解明できることになる。一面では不経済とも迂遠とも表層的には捉えられがちなこのような事項も、われわれの近い過去の歴史を振り返ってみたいとき、さらには、これからの行く末を模索するうえで、決して無益なことでないといえよう。

ともあれ、上記のような実態を明らかにし無事に発掘調査・報告を貫徹できたのは、大阪府教育委員会、大阪府土木部風土木事務所、地元自治会をはじめとする関係各位のご指導、ご協力のたまものである。あらためて感謝もうしあげるとともに、これからも当センターへのご支援を切に祈念したい。

平成13年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、都市計画道路池上下宮線建設予定地内に所在する、^{ひかたきた}伯太北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部鳳土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センターの前身の1つである財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 現地調査は、1992・1993年度にわたって実施した。1992年度は(財)大阪府埋蔵文化財協会調査課第1班(班長西口陽一)技師・駒井正明が、1993年度は同第2班(班長西口陽一)技師・秋山浩三がそれぞれ担当した。
4. 調査期間は1992年6月24日～9月25日、ならびに1993年9月27日～1994年1月31日である。
5. 調査の実施および整理作業では、関係諸機関・地元自治会をはじめ、和泉市教育委員会 乾 哲也氏・白石耕治氏、東大阪市教育委員会福永信雄氏よりご協力・ご教示いただいた。
6. 遺構写真は上記担当者が、遺物写真は小倉 勝・立花正治が撮影した。
7. 本書の執筆は、第I章・第II章・第III章第1・2節・第IV章を駒井が、第III章第3・4節を秋山が担当した。なお本書は調査終了直後の1994年度段階に各担当者が作成したため、B5版の体裁をとっている。編集実務は駒井が担当した。
8. 調査・整理の過程で作製した図面・写真および出土遺物は、当センターで保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図、その他の図に付された北方位は、全て座標北を示す。
2. (財)大阪府埋蔵文化財協会では、国土座標(第VI系)を基準として独自に設定した地区割方法があるが、本書では主として現場で付与した地区呼称を使用する。
3. 発掘調査及び本書記述のレベル高は、T.P.(東京湾平均海面)+の数値を使用している。本文中ではT.P.+を省略して記載した。また座標値の単位kmも省略した。
4. 遺構の記号及び遺構番号は、協会の定めた方法に従って調査を進めた。なお、遺構の記号は以下に示すとおりである。
OB:掘立柱建物 OO:土坑 OP:ピット OS:溝
OX:不明・その他
5. 今回の調査は、2名の担当者が別個に調査を行ったため、層位・遺構などに対する認識が当然異なる。また文章記載・挿図作成についても同様である。本書では、個々人の調査・整理方法を尊重したため、全体的な統一は行わなかった。
6. 本書での本文、挿図、写真図版の遺構・遺物番号は全て一致する。
7. 土層・土器の色調は、『新版 標準土色帖』7版 1987によった。

目 次

第Ⅰ章 経 過	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	2
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査の方法と経過	4
第2節 1992年度の調査成果	5
第3節 1993年度の調査成果	11
第4節 出土遺物	26
第Ⅳ章 ま と め	41

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図
第 2 図 周辺遺跡分布図
第 3 図 調査区地区割図
第 4 図 1992年度調査区基本層序断面図
第 5 図 1992年度調査区遺構配置図
第 6 図 16 - OB
第 7 図 17 - OB
第 8 図 2 - OB
第 9 図 1993年度調査区基本層序断面図
第 10 図 A - 1・2区遺構配置図
第 11 図 A - 1区東端遺構実測図
第 12 図 A - 1区西端遺構実測図
第 13 図 A - 1区主要遺構断面図
第 14 図 A - 2区主要遺構断面図

- 第15図 B-1・2区遺構配置図
 第16図 B-1区東半遺構実測図
 第17図 B-2区南半遺構実測図
 第18図 B-1区主要遺構断面図
 第19図 B-2区主要遺構断面図
 第20図 遺物実測図・拓影-1 (遺構出土)
 第21図 遺物実測図・拓影-2 (遺構出土)
 第22図 遺物実測図・拓影-3 (包含層出土)
 第23図 遺物実測図・拓影-4 (包含層出土)
 第24図 遺物実測図・拓影-5 (包含層出土)
 第25図 遺物実測図・拓影-6 (包含層・その他出土)

表 目 次

- 第1表 出土遺物観察表

図 版 目 次

- 図版 1 (1) 1992年度調査地全景 (東から)
 (2) 2-OB全景 (北から)
 図版 2 (1) 1993年度調査地全景 (航空写真・東から)
 (2) 1993年度調査地全景 (航空写真・北から)
 図版 3 (1) A-1区全景 (航空写真・北から)
 (2) A-1区全景 (航空写真・東から)
 図版 4 (1) A-1区全景 (西から)

- (2) A-2区全景(東から)
- 図版 5 (1) B-1区全景(航空写真・東から)
(2) B-1区全景(西から)
- 図版 6 (1) B-2区全景(航空写真・北から)
(2) B-2区全景(東から)
- 図版 7 (1) A-1区:小溝群 18~26-OS(南南西から)
(2) A-1区:土坑 33-OO(西から)
- 図版 8 (1) A-2区:溝 42-OS(北から)
(2) B-1区:溝 53-OSほか(南から)
- 図版 9 (1) B-2区:土坑群 134・141・146-OOほか(西から)
(2) B-2区:土坑群 118~122・131-OOほか(南東から)
- 図版 10 (1) 遺構・包含層出土遺物
(2) 遺構出土遺物-1
- 図版 11 (1) 遺構出土遺物-2
(2) 遺構出土遺物-3
- 図版 12 (1) 遺構出土遺物-4
(2) 包含層出土遺物-1
- 図版 13 (1) 包含層出土遺物-2
(2) 包含層・その他出土遺物

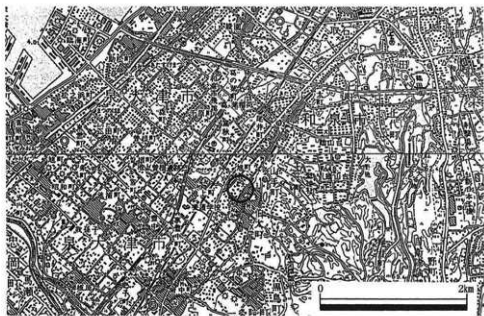
第I章 経 過

伯太北遺跡は大阪府和泉市伯太町に所在する遺跡である。同遺跡のある大阪府南西部、泉州地域は、近年関西国際空港建設に関連した道路網整備が進められてきた。そのような中、和泉市内でも同市池上町から同市横山までを結ぶ道路として、都市計画道路池上下宮線建設が具体化した。

1987年、(財)大阪府埋蔵文化財協会は大阪府教育委員会の指示により、信太山丘陵西側斜面から主要地方道大阪・和泉・泉南線までの区間、約4.5kmの確認調査を実施した。しかし調査地は、JR信太山駅南東側の住宅密集地帯に位置するため、用地買収・構造物撤去に時間を要した。同様の調査は続く1991年も行った。

確認調査は、遺構・遺物の残存状況を確認することを目的とした合計14ヵ所のトレンチを設定した。その結果、包含層の堆積が認められた箇所について、1992～1993年全面調査を実施することとなった。調査面積は、92年度が約850㎡、93年度が約1200㎡である。

なお1990年発行の「大阪府文化財分布図」によると、今回調査した地点は周知された「伯太北遺跡」の範囲内ではなく、北東の隣接地となる(第1図)。



第1図 遺跡位置図 (S=1/50000)

第Ⅱ章 遺跡の環境

伯太北遺跡は、大阪府南西部（和泉）に広がる丘陵地帯の一角、通称信太山丘陵西側斜面に位置する。和泉の地形的特色は、「近畿トライアングル」と呼ばれる美濃・丹波・紀伊の三方からの圧縮現象によって生じた丘陵群にあるといわれている。これらの丘陵には、大小さまざまな支谷が発達しており、後世谷池が築造されるようになった。現在当遺跡の約2km南に横尾川が、約4km北東に石津川があるが、かつては当遺跡付近にも河川が存在したらしく、今とは異なった地形環境であつたらしい。

以下伯太北遺跡を取り巻く代表的な遺跡を簡単に紹介しておこう（第2図）。

和泉市教育委員会による伯太北遺跡の調査では、ナイフ形石器の出土が報告されているが、ユニット・ブロックといった石器集中箇所は未発見である。周辺では北へ1.5km離れた大園遺跡でこれらが確認されている。また縄文時代後・晩期の土器が泉大津市板原遺跡・虫取遺跡で出土している。

弥生時代になると、当遺跡西側に池上曾根遺跡が出現する。近年史跡整備による発掘調査が実施され、前期に出現した集落が中期になって拡大し、2重の溝で取り囲まれた中には祭祀遺構や各種工房跡、住居群が規則的に配置されていたことが明らかとなってきた。しかし従来環濠と考えられてきた2重の溝は全局せず、遺跡西側の湿地帯に注ぐことも判明した。この池上曾根遺跡も、後期になると溝の廃絶をはじめ、かつてみられた規則性が解体されるという。府中遺跡や豊中遺跡といった弥生時代後期～古墳時代前期の集落が、横尾川右岸に出現する。

古墳時代には信太山丘陵縁辺を利用して、丸笠山古墳・黄金塚古墳といった前方後円墳が築造されるが、和泉では、最古型式の前方後円墳が確認されておらず、上記2古墳は、岸和田市摩湯山古墳に続く首長墳とみなされている。後期になると、信太千塚古墳群が形成されたが、1950年代の開発によってかなりの古墳が消滅した。

この信太山丘陵は斜面が緩やかなこともあって、この頃「陶邑」と呼ばれる一大須恵器生産地を形成することになった。

奈良時代には信太寺や坂本寺といった古代寺院が周辺に造営され、和泉国府がJR阪和線と和泉府中駅周辺に営まれたといわれているが、関連遺構は現在まで確認されていない。



- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| 1 : 水源地遺跡 | 7 : 丸笠山古墳 | 13 : 府中遺跡 |
| 2 : 大園遺跡 | 8 : 信太千塚古墳群 | 14 : 和泉寺跡 |
| 3 : 池上曾根遺跡 | 9 : 伯太北遺跡 | 15 : 和氣遺跡 |
| 4 : 黄金塚古墳 | 10 : 豊中遺跡 | 16 : 観音寺山遺跡 |
| 5 : 信太寺跡 | 11 : 板原遺跡 | 17 : 池田寺跡 |
| 6 : 陶邑窯跡群 | 12 : 和泉国府跡 | 18 : 池田寺遺跡 |

第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/50000)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の方法と経過（第3図）

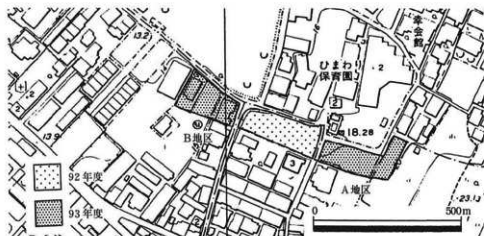
調査地は、市道によって大きく3ヵ所に分断されている。1993年度調査区は、大きく2ヵ所に分れていたためA・B区に分け、さらに各々A-1・A-2区・B-1・B-2区に細分した。この呼称は本文中でも採用している。

遺跡の位置や調査区内の地区割については、新平面直角座標系第Ⅶ系を使用して、その位置を明示する。そのため調査に際しては、同座標に基づく基準杭を数ヵ所設置し、遺物取り上げの最小単位となる4m区画を調査地内に設置した。

検出した遺構は、各調査年度ごとに1番からの連番を付与する。また遺構の呼称についても協会独自に定めたものを使用する。

さて調査では現代の盛土や表土層を重機によって掘削した。今回の調査区は、駅前住宅密集地に位置しており、特に1992年度調査地は多量の産業廃棄物が地中に埋められていたため、この機械掘削にはかなりの時間を要した。これより以下の層は、各担当者の判断で適宜分層発掘を実施した。

検出した遺構は、原則として航空測量によって1/20、1/100の平面図・遺構図を作成する。ただしそれ以外の一例えば断面図などは、職員などによって実測する場合もある。



第3図 調査区地区割図

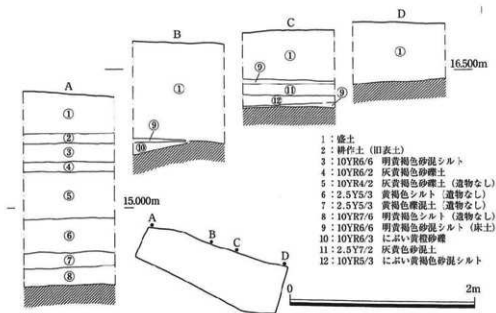
第2節 1992年度の調査成果（第4～8図、図版1）

1. 基本層序（第4図）

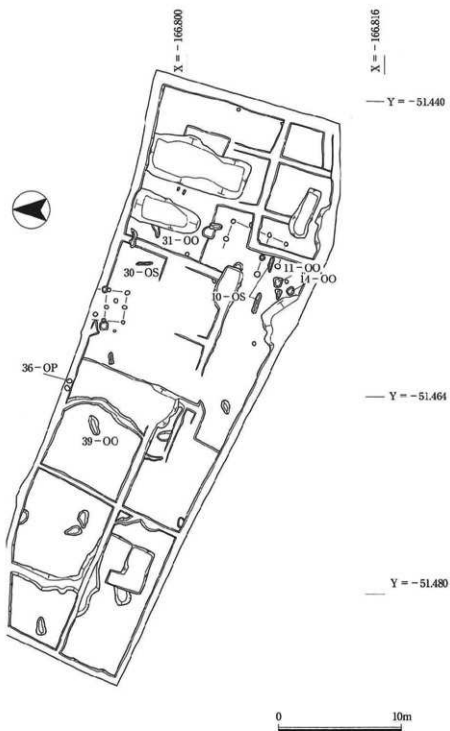
調査区内は全域にわたって盛土され、市立幸保育園の建物基礎や撤去に際して廃材を地中に埋め戻したため、全域にわたって攪乱坑を確認した。このため旧表土である耕作土は、ごく限られた部分しか残っておらず、遺物包含層の広がり・連続性も十分把握できなかった。しかし検出した地山面が段状であること、わずか残存した床土層にも同様の段差が認められることから、保育園建設前は地形に沿った段々畑が営まれていたらしい。

わずかに遺存した包含層は以下の如くである。調査区東端は一部褐色砂質土が堆積するが、基本的には盛土を除去すると黄褐色を呈した地山が露呈する。遺物包含層が認められたのは、調査区中央付近である。ここでは、灰黄色砂質土・赤褐色砂質土という上下2層に分れる包含層を確認したが、攪乱のため必ずしも良好な状態とはいえなかった。上層では近世陶磁器を、下層では瓦質土器を包含する。

さて地山面は中央付近まで比較的平坦であるが、そのあたりから緩やかに傾斜し、西端ではT.P.+14.2mである。この緩斜面には、黄褐色系の砂泥シルトや小礫混じり土が堆積するが、断面観察する限り谷地形に自然堆積した土砂かと思われる。遺物は全く含まれない。



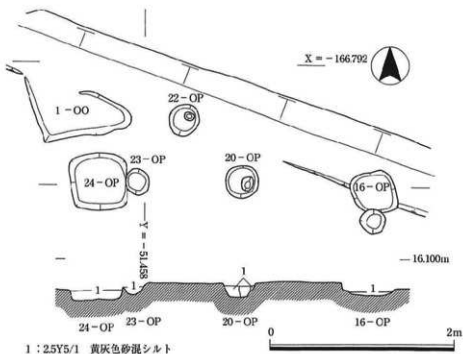
第4図 1992年度調査区基本層序断面図



第5図 1992年調査区遺構配置図

2. 検出遺構 (第5～8図)

検出した遺構は、掘立柱建物3棟、溝数条、土坑数基である。しかし中世以降の開発に伴い地山面をかなり削平したため、遺構の遺存度は悪い。そのため遺構には遺物がほとんど伴わなかったため、時期を限定することは極めて難しい状況にある。

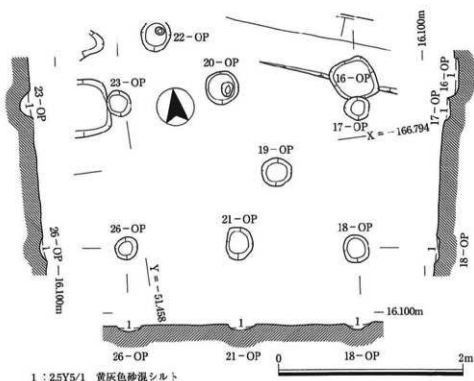


第6図 16-OB

掘立柱建物 16-OB

調査区中央北壁付近で検出した建物跡で、その大半は調査区外に広がるため、全容は不明である。ここでは16・20・24-OPがこの建物を構成する柱穴と考えたが、20-OPのみ円形を呈することから、この柱穴が次に述べる17-OBを構成する柱穴である可能性もある。

この建物を構成する柱穴は、17-OBを構成する柱穴に切られているので、それに先行することは確実であるが、遺物は一切出土しなかった。しかし①柱穴が奈良時代の建物に特徴的な方形を呈すること、②20-OBの時期以前であることを勘案すると、奈良時代である可能性がある。



第7図 17-OB

掘立柱建物 17-OB

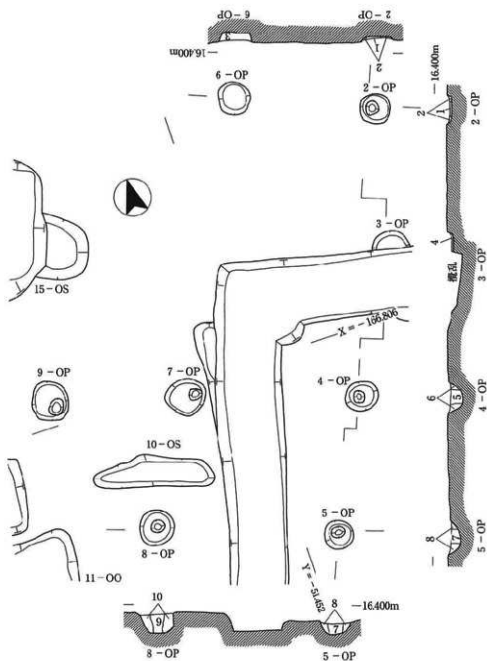
16-OBに重複して検出した2間以上の規模を有する掘立柱建物で、その大半は調査区外にひろがると考えられる。柱穴はいずれも30cm前後の円形を呈するが、いずれも深さ10cm以下と、遺存度は極めて悪い。

21-OP掘形から土師器杯破片が出土した。

掘立柱建物 2-OB

調査区東半で検出した2×3間の総柱建物である。しかし、検出した柱穴断面をみても10cm前後とかなり削平されていることは疑いなく、本来あるべき位置に確認できない柱穴も数カ所あった。よって実際の規模がさらに拡大する可能性もある。9-OPのみ根石を確認した。

柱間は梁間3.3m前後、桁行4.8m前後を測る。柱穴から遺物は須恵器や土師質土器が出土した。また瓦器片を出土する33-OSと、2-OBの妻側がほぼ平行していることから、この建物は中世に属すると思われる。



- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 : 2.5Y 6/1 黄灰色砂混シルト | 6 : 7.5YR5/1 褐灰色砂混シルト |
| 2 : 7.5YR5/1 褐灰色砂混シルト | 7 : 2.5Y 6/1 黄灰色砂混シルト |
| 3 : 2.5Y 4/1 黄灰色シルト | 8 : 7.5YR5/1 褐灰色砂混シルト |
| 4 : 7.5YR5/1 褐灰色砂混シルト | 9 : 2.5Y 6/1 黄灰色砂混シルト |
| 5 : 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト | 10 : 10YR6/2 灰黄褐色砂混シルト |



第8図 2-OB

溝 33－OS

調査区東半で検出した幅 1.4m 前後、長さ約 7m の溝跡である。検出時の深さは約 10 cm 程度しかなく、他の遺構同様かなり削平されている。

出土遺物はいずれも細片ばかりであるが、土師質土器や瓦器を含むことから、具体的な時期は限定できないが、中世に存在した溝と考えられる。

なおこの溝を含めて今回の調査では、周辺に残存する条里制地割に影響された施設は全く検出できなかった。同地割は信太山丘陵斜面にまでは及ばず、地形区によると 93 年度に調査を行った B 地区あたりで終わるらしい。

その他の遺構

その他 2－OB 周辺や 16・17－OB 周辺には、土坑や柱穴・溝などが散見される。このうち 2－OB 西側に隣接する 11・14－OO からは、土師質土器片や瓦器片が若干量出土し、36－OP では土師器片がみついている。

これに対して、調査区西側に堆積した黄褐色砂泥シルト層上面で検出した遺構から、遺物は一切出土しなかった。

これらのことから、周辺に営まれたであろう古代・中世の集落は、当調査区北側に展開するものとする。

第3節 1993年度の調査成果(第9～19図、図版2～9)

1. 基本層序(第9図)

(1) A-1・2区

2カ年度調査の最も高所部にあたる本区の現地表面は、①A-1区東端部、②A-1区中央部、③A-1区西端部～A-2区の範囲において、3面のおおむね平坦地となっていた。これらは、東から西へつまり①から③の順に、段差をもって標高を下げる。全域に近時の盛土がなされるとともに削平や攪乱が各所におよんでいたため、堆積層の遺存は必ずしも良好ではなかったが、この3面は近時における耕作面の形状を示していると考えられる。

①部面の大部分では、近時盛土下には、近世遺物を若干含む薄い包含層ほかが存在する。その直下は段丘堆積層となり、この上面を調査では地山面と判断した。現地表面下約0.3mで地山面となり、古代～近代にいたる遺構を検出した。

②部面では、南端の一部をのぞいて削平が著しくおよんでいる。近時の盛土下は、近代以降の堆積層で、現地表面下約0.4mで地山面となる。南端部ではかろうじて中世遺構を確認できたが、他の部分では地山上面で、近・現代の遺構を検出したにすぎない。

③部面は後世の攪乱や削平が比較的少なく、多くの範囲で近時の盛土下には、旧耕作土および旧床土層が保存されていた。その下には、若干の近世遺物を包含する層を介させて、A-2区西半部では薄い中世包含層(にぶい褐色砂質土ほか)がみられた。その直下が地山面となり、現地表面下約0.7～0.9mにあたる。地山上面で、古代～近代の遺構を検出した。

本区では、地山層と判断した諸層にも部分的に人力掘削がおこなったが、遺構、遺物は全く検出できなかった。

(2) B-1・2区

2カ年度調査の最も低所部にあたる本区の現地表面は、①B-1区東半部、②B-1区西半部～B-2区の範囲において、段差をもって前者が高い平坦面となっていた。この2面は、A区と同様に近時における耕作面の形状を示していると考えられる。全域には近時の盛土がなされるとともに削平や攪乱が各所におよんでいたが、堆積層の遺存はA区に比べて良好であった。

①②部面とも基本層序は原則として、上層から、近時盛土層、旧水田層、旧床土層となり、その下には部分的に無遺物層をはさみ、近世包含層、中世包含層(褐色砂質土、明褐

色粘質土ほか)、古墳後期包含層(褐灰色砂質土、明褐灰色砂質土ほか)が存在する。しかし、近世包含層はB-1区東半部で、中世および古墳後期包含層はB-1区西端～B-2区東端において顕著であったが、他の範囲では各包含層を欠く部分が多い。古墳後期包含層の下面が地山層になり、現地表面下約0.55～1.4mにあたる。

近世包含層下で近世ほか所産の遺構面を、古墳後期包含層下で古墳後期の所産と推定できる遺構面を検出し、前者を上層遺構面、後者を下層遺構面と呼んだ。

なお、B-2区では古墳後期包含層中から有基尖頭器を検出し、また、木遺跡の既往の調査でも旧石器時代の石器が採取されていたので、地山層と判断した諸層にも比較的広い範囲にわたって確認調査をおこなったが、遺物等は全く検出できなかった。

2. 検出遺構と遺物出土状況

(1) A-1・2区(第10～14図)

近現代の段造成等による削平や攪乱が著しかったため、検出できた遺構は多くはなく、しかも共伴遺物が少なかったため時期を確定できたものは少ない。検出できた遺構には、近世以降の小溝数条、土坑数基、中世の段状遺構2基、小溝数条、土坑2基、平安初期の溝1条、土坑1基等がある。

本区の出土遺物には、遺構に伴ったものは少ないが、古墳後期～近世の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、埴輪等がある。

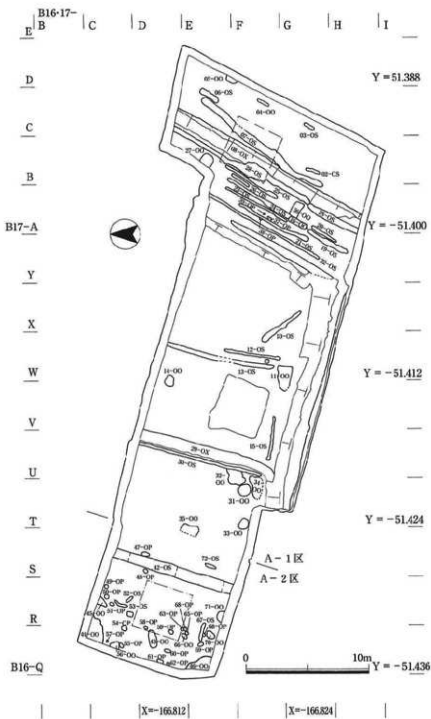
以下、出土遺物や埋土の状況から、ある程度の時期推定できる遺構を中心に概要を述べる。

段状遺構8-OX

A-1区東端で検出した、幅約0.8～1.2m、比高差約0.8mを測る、東側が高い段状遺構である。ほぼ北北東～南南西に主軸をおく。低い西側には、灰褐色・にぶい橙色・にぶい褐色・橙色・明褐色ほかの砂質土等がほぼ水平で竊状に堆積しており、土師器片、須恵器片、陶磁器片、青磁片、瓦器片、瓦片、埴輪片等が出土した。西側の底面付近では、後述する小溝群18～26・41-OS等が検出された。遺物等から中世の所産と推定できる。

段状遺構29-OX

A-1区西端で検出した、幅約1.0m、比高差約0.8mを測る、東側が高い段状遺構である。ほぼ北北東～南南西に主軸をおく。西側裾付近の段差底面では、時期は確定できないが小溝30-OSを平行して検出できた。低い西側には暗褐色砂質土ほかの堆積しており、土師器片、須恵器片、陶磁器片、瓦器片等が若干出土した。確定要素に欠けるが、遺構の



第10图 A-1・2区遺構配置図

状況から中世の所産の可能性がある。

小溝群 18～26・41-OS

A-1区東端、段状遺構 08-OXの西側底面付近で検出した、幅約0.2～0.8m、深さ約0.05～0.1mを測る小溝からなる、溝群である。いずれの小溝もほぼ南南西—北北東に主軸をおき、おおむね平行してのびる。各小溝の横断面形は逆台形状～U字形状を呈し、埋土は褐色系砂質土からなり、いくつかの小溝から土師器片、瓦器片が若干出土した。小溝の配列状態から判断して畑作関連の遺構であろう。遺物等から中世の所産と推定できる。

土坑 27-OO

A-1区東端で一部を検出した、南北約1.0m、東西1.1m以上、深さ約0.15mを測る、平面が隅丸方形形状の土坑である。横断面形はすり鉢状を呈し、埋土は褐色系砂質土からなる。遺物は出土しなかった。層位関係から中世の所産と推定できる。

土坑 16-OO

A-1区東端で検出した、長軸約1.15m、短軸約0.5m、深さ約0.5mを測る、平面が長方形形状の土坑である。ほぼ北北東—南南西に主軸をおく。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色砂質土、灰褐色砂質土からなり、土師器片が若干出土した。遺物や層位関係から中世の所産と推定できる。

溝 1-OS

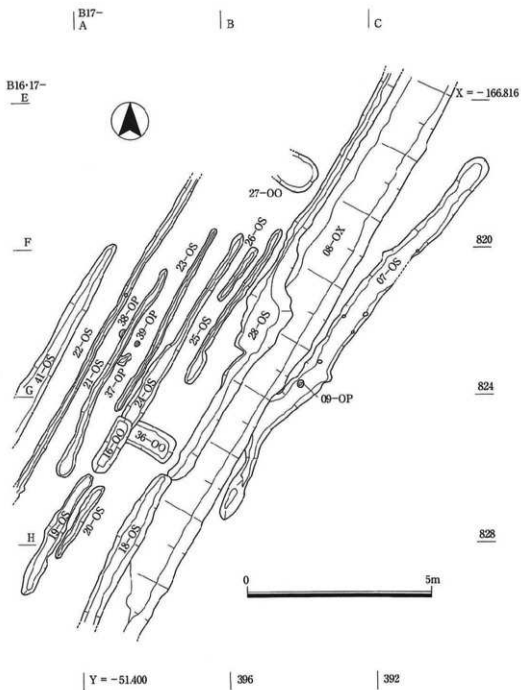
A-1区中央南端で北肩部分だけを検出した、幅約0.45m以上、深さ約0.1m以上を測る素掘り小溝である。ほぼ東南東—西北西に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土は褐色系砂質土からなり、土師器片、須恵器片、瓦器片が若干出土した。遺物等から中世の所産と推定できる。

溝 42-OS

A-2区東半で検出した、幅約1.0m、深さ約0.4mを測る素掘り溝である。ほぼ南南西—北北東に主軸をおく。横断面形は鈍い逆台形状を呈し、埋土は褐色砂質土からなり、土師器片、須恵器片、瓦器片が若干出土した。規模がやや大きく、また、以西に遺構が集中する傾向にあるので、本遺構は区画溝である可能性がある。遺物等から中世の所産と推定できる。

溝 7-OS

A-1区東端で検出した、幅約0.4～0.8m、深さ約0.15mを測る素掘り溝である。やや蛇行するが、ほぼ南西—北東に主軸をおく。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は明褐色



第 11 图 A-1 区東端遺構実測図

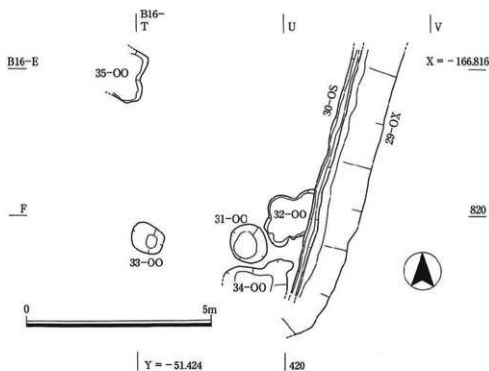
色砂質土からなり、土師器片、須恵器片が若干出土した。遺物出土量が少ないので確定要素に欠けるが、平安初期の所産と推定できる。

土坑 33-00

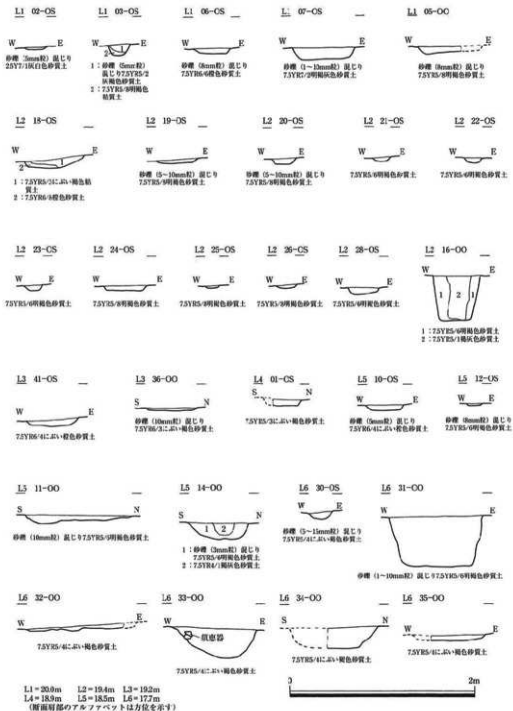
A-1区南西端で検出した、長軸約1.9m、短軸約0.8m、深さ約0.3mを測る、平面が不整長円形状の土坑である。ほぼ西北西—東南東に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土はにぶい褐色砂質土からなり、土師器片、須恵器片が出土した。遺物から平安初期の所産と推定できる。

その他の遺構

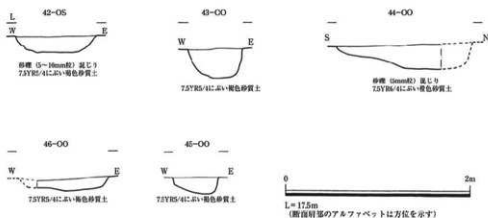
上記した以外の遺構では、A-1区東端の溝 02～06-OS等は近代の、A-1区中央部の溝 10・12・13・15-OS、土坑 11・14-00等は近現代の、A-1区西端の溝 30-OS、土坑 31・32-00等は可能性として中世の、A-1区西端の土坑 35-00は近現代の、A-2区の土坑 43～46-00、多数のピット等は一部に古代にさかのぼるものを含みつつ可能性として中世の所産と推定できる。



第12図 A-1区西端遺構実測図



第13図 A-1区主要遺構断面図



第14図 A-2区主要遺構断面図

(2) B-1・2区 (第15～19図)

本区の遺構も相伴遺物が多くはないので時期の確定要素に欠けるが、上層遺構面には、近世の溝2条、落ち込み状遺構1基、下層遺構面には、古墳後期の溝数条、土坑20数基、ピット数基がある。後者の遺構面は、古墳後期包含層の下で検出できたので、古墳後期と推定したが、特にB-2区の諸遺構には出土遺物がほとんどなかったので時期比定にやや疑問を残す。

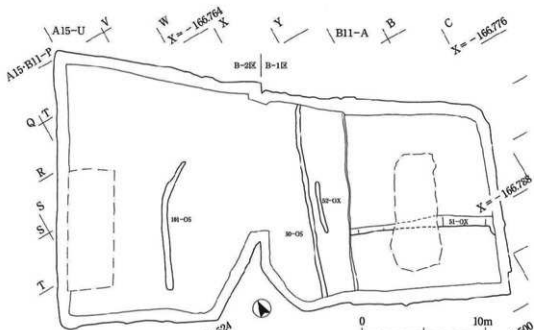
本区の出土遺物には、遺構に伴ったものは少ないが、旧石器終末(縄文草創期)～近世の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、埴輪、土製品、石製品等がある。古墳後期包含層の出土品には須恵器を主体として一定量がみられた。

以下、出土遺物や埋土の状況から、ある程度の時期推定できる遺構を中心に概要を述べる。

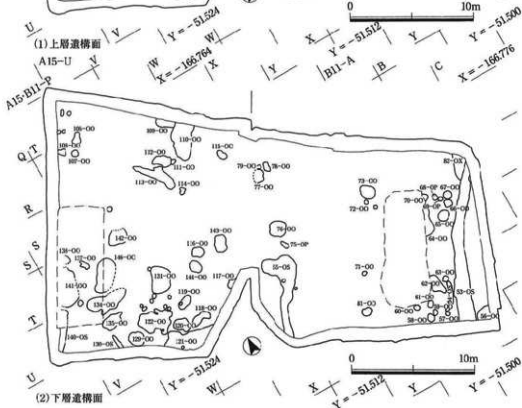
a 上層遺構

落ち込み状遺構 51-OX

B-1区東半で検出した、深さ約0.4mを測る、北方向への落ち込み状遺構である。南肩部は、ほぼ東南東-西北西に主軸をおく。埋土は褐灰色砂質土ほかからなり、土師器片、須恵器片、陶磁器片、瓦片、土製品が出土した。また、肩部付近の底面には薄い炭化物層がみられた。遺物から近世の所産と推定できる。



(1) 上層遺構面



(2) 下層遺構面

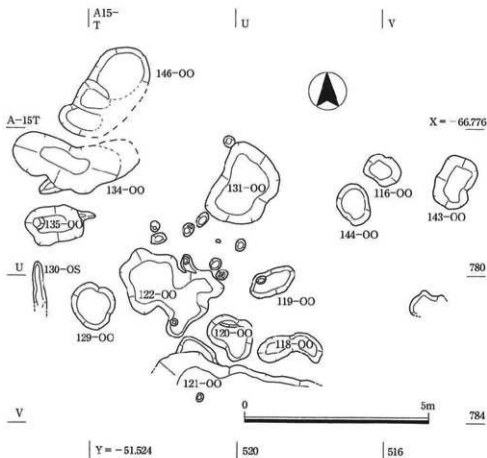
第15圖 B-1・2区遺構配置圖

溝 52 - OS

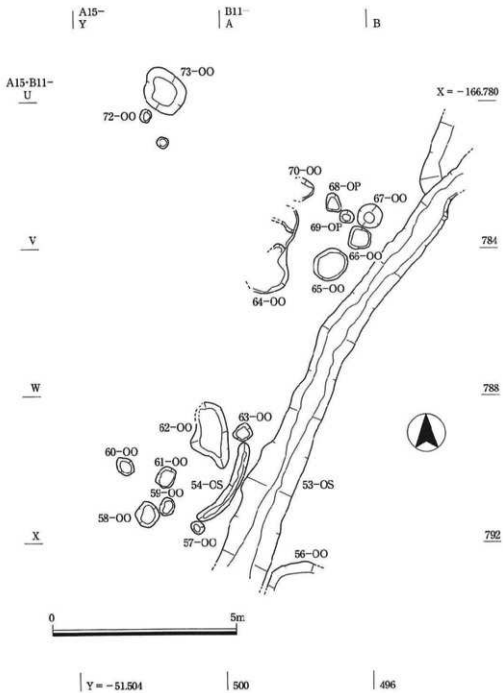
B-1区西半で検出した、幅約0.4m、深さ約0.1mを測る素掘り溝である。ほぼ南南西-北北東に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土はにぶい褐色砂質土からなり、土師器片、須恵器片、陶磁器片が若干出土した。遺物から近世の所産と推定できる。

溝 50 - OS

B-1区西半で検出した、幅約0.6m、深さ約0.1mを測る素掘り溝である。ほぼ南南西-北北東に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土は拳人の円礫を多く含む褐色砂質土、橙色砂質土からなり、土師器片、須恵器片、瓦器片、陶磁器片、瓦片がやや多く出土した。遺物から近世の所産と推定できる。



第17図 B-2区南半遺構実測図



第 16 图 B-1 区東半遺構実測図

溝 101 - OS

B-2区中央で検出した、幅約0.5~1.0m、深さ約0.2mを測る素掘り溝である。ほぼ南南西-北北東に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土は拳大の円礫を多く含む褐灰色砂質土からなり、土師器片、須恵器片、瓦器片、陶磁器片、瓦片がやや多く出土した。遺構や遺物の内容等は、上記の溝50-OSに類似しており、関連性がうかがわれる。遺物から近世の所産と推定できる。

b 下層遺構面

溝 53 - OS

B-1区東端で検出した、幅約0.9~1.4m、深さ約0.2~0.4mを測る素掘り溝である。平面形は東方向に開く弧状をなし、ほぼ南南西-北北東に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土はにぶい褐色砂質土からなり、土師器片、須恵器片（ほぼ完形品を含む）がややまとまって出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

溝 54 - OS

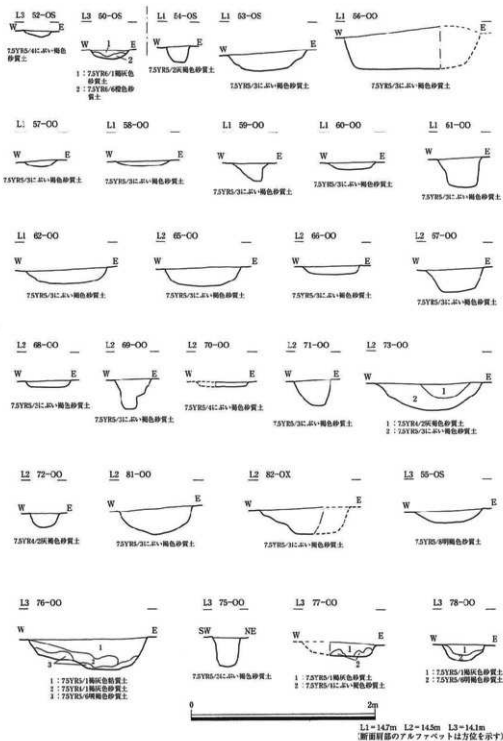
B-1区東端で検出した、幅約0.15m、深さ約0.15mを測る素掘り溝である。平面形は西方向に開く弧状をなし、ほぼ南南西-北北東に主軸をおく。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色砂質土からなり、土師器片、須恵器片が若干出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

土坑 62 - OO

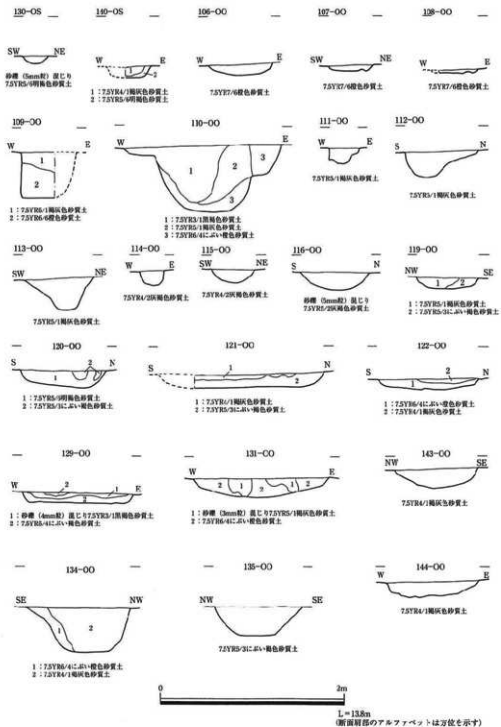
B-1区東端で検出した、長軸約1.8m、短軸約0.8m、深さ約0.15mを測る、平面が不整形の土坑である。ほぼ北-南に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土はにぶい褐色砂質土からなり、須恵器片が若干出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

その他の遺構

上記した以外では、B-1区の溝55-OS、土坑73~76-OO等や、B-2区の土坑113・118・121・122・131-OO等の多くの遺構があるが、ごく一部に古墳後期を下限とした時期の土器類を出土したものの、多くの遺構は全く遺物は出土しなかった。これらは、古墳後期の包含層の直下で検出できたので、一部にはさかのぼる時期のものを含みつつ、可能性として古墳後期の所産と推定できる。



第18図 B-1区主要遺構断面図



第19図 B-2区主要遺構断面図

第4節 出土遺物（第20～25図、第1表、図版10～13）

2ヶ年度調査の出土遺物は、整理用コンテナ（約54×34×15cm）にして約30箱である。所属時期としては、旧石器時代終末（あるいは縄文草創期）～近世・近代にまでおよぶ。今回の報告にあたっては、出土遺物量がさほど多くはなかったので、図化可能な遺物は極力図示することに努めた。従って、本書に掲載した遺物実測図の点数が、各時期の出土量をおおまかに反映しているといえる。その点数を記すと、有茎尖頭器1点、縄文～弥生時代石製品2点、弥生土器2点、古墳時代土器類58点、埴輪9点、古代（奈良～飛鳥時代）土器・瓦類46点、中世土器・瓦類ほか28点、近世陶磁器・瓦類13点、その他1点となる。従って、最も多いのが古墳時代（中心は後期）、次いで古代の遺物である。

以下、遺構と包含層ほかの出土品に分けて調査年度と調査区ごとに、図示遺物を中心に概要を述べる⁽¹⁾。なお、遺物の法量、色調、胎土、調整・手法、焼成硬度、保存状態、遺存度などの観察結果は、本書末に観察表（第1表）を添付してあるので、詳細はそれを参照されたい。従って、本文での記載は、形態や文様等に重点をおき、観察表にある内容に関しては、一定の意味のある場合をのぞいて触れない。また、土器類等の様式、型式、器種名、形態分類ほかの記載基準は、主として、弥生土器では小林行雄氏、佐原眞氏ほかの、古墳時代土器類では田辺昭三氏の、埴輪では川西宏幸氏の、古代土器類では奈良国立文化財研究所ほかの、中世土器類では橋本久和氏ほかの区分内容に準拠する⁽²⁾。

1. 遺構出土（第20・21図）

(1) 1992年度調査区

堀立柱建物17-OB：柱穴21-OP出土

土師器の杯A（1）がある。

底部と口縁（体）部が屈曲をもって区分され、口縁部はほぼ直線的に上方外にのびる。口縁端は外折し、端部内面には沈線状の凹部がめぐる。原則として口縁部の上半だけが強いヨコナデがなされ、以下は不調整のe手法をとる。ヨコナデは比較的強くなされるため、外表面は凹凸をもつ。

平安時代初頭（9世紀前半）の所産である。

(2) 1993年度調査区

A A-1・2地区

段状遺構8-OX出土

瓦器（2・3）、土師器（4）、須恵器（5～10）、埴輪（11～18）、瓦（19・20）が

みられる。

瓦器には、碗底部片（2）と羽釜（3）がある。前者は、薄い器壁で、底部外面には退化した低平な高台が付く。後者は、内湾する口縁部の外面に鈎が水平にめぐり、その上位面には凹線が3条施される。

土師器は高杯（4）で、杯部基底から脚軸部上端にあたる。脚軸部外面は面取りがなされており、遺存範囲では4面を数える。

須恵器には、杯A、杯B、高杯、壺ほかがある。杯A（5）は底部外面に回転ヘラケズリが施され、底部と口縁部の境が明瞭となる。この技法は本器種のなかでは古い様相を示す。杯B（6・7）はともに底部付近片で、断面形状の高台が底部端より内側に寄った位置に付く。壺（8・9）のうち、（8）は体肩部の上位に取り付けられた環状把手部である。把手は粘土紐で成形される。壺Nになろうか。底部片（9）はやや外開きの高台が付く。底部径から判断して小形品であるので、壺Lの可能性もある。（10）は、器形は判然としないが、扁平な壺あるいは鉢状の体部に推定できる。遺存片の最下部には、脚台または粘土紐の剥離した痕跡が観察でき、上端の肩部外面には横位「C」字状の竹管文が横方向に施される。胎土や色調等は、一見したかぎりでは軟質焼成の須恵器と差異はないが、器形や文様等の特徴から新羅系土器である可能性がある。

埴輪には、普通円筒（11～17）と朝顔形（18）がある。突帯が遺存する例では、低平な（11・12・14）とやや突出する（13）がみられ、前者の方が多い。（13）は、突帯の残っていない個体も含め他の埴輪片に較べて、胎土や色調が異質で特徴的である。朝顔形（18）は、ラッパ状に開く口縁部の突帯付近にあたる。これらの埴輪はいずれも、小形品に復原でき、外面はタテハケ調整され、土師質の軟質焼成であるが黒斑は認められない。

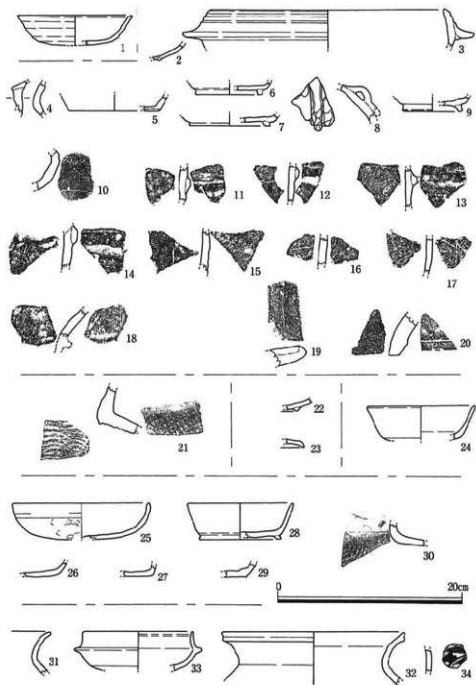
瓦には、平瓦（19）と丸瓦（20）の小片がある。ともに長側辺の一部をとどめる。凹面には布目圧痕が遺存するが、凸面はナデ調整で平滑に仕上げられる。

なお、図示しなかったが他に、青磁碗の小片等がみられる。

これらは、（2）が鎌倉中期（13世紀中葉）、（3）が室町中期（15世紀後半）、（19・20）が室町時代（15世紀）、（4～9・10？）が奈良時代（8世紀）、（11～18）は古墳後期前半（6世紀前半：埴輪編年Ⅴ期）の所産である。従って、（3・19・20）が本遺構の最終埋積時期を示している可能性が強く、他の遺物は混入品と考えられる。

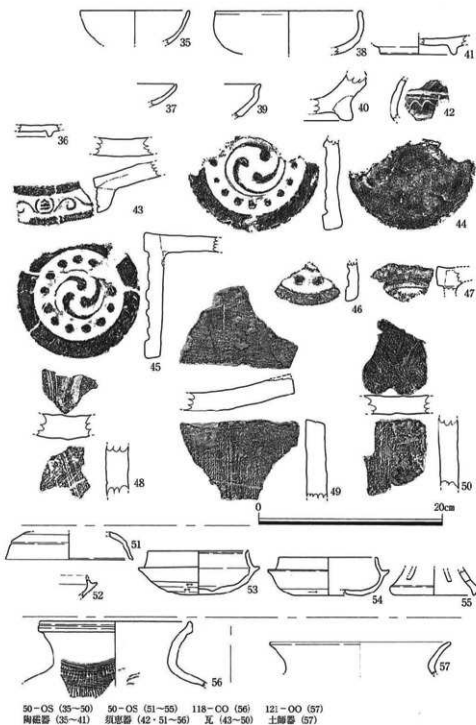
溝22-OS出土

須恵器の甕（21）がある。大形品の体部上端から頸部最下端にあたる。



21-OF・17-OB (1) 8-OX (2-20) 22-OS (21) 1-OS (22・23) 7-OS (24) 33-OO (25-30)
 51-OX (31-34) 土師器 (1・4・25・31) 瓦器 (2・3・22) 須恵器 (5-10, 21・23・24・26-30・32・33)
 埴輪 (11-18) 瓦 (19・20) 土製品 (34)

第20図 遺物実測図・拓影-1 (遺構出土)



第21図 遺物実測図・拓影-2 (遺構出土)

古墳後期（6世紀）の所産であろう。ただし、本遺構の属する小溝群からは瓦器小片が出土しているので、本例は混入品と判断できる。

溝1-OS出土

瓦器（22）と須恵器（23）がみられる。

瓦器は、椀の底部片で、断面三角形の低い高台が付く。

須恵器は、杯B蓋の口縁端部片で、端部が屈曲部をもたないA形態にあたる。口縁端部は外下方に短く垂下する。

これらは、（22）が鎌倉中期（13世紀中葉）、（23）が奈良時代（8世紀）の所産である。従って、（22）が本遺構の最終埋積時期を示している可能性が強く、（23）は混入品である。

溝7-OS出土

須恵器の杯A（24）がある。下方に突出した底部から屈曲して口縁部がほぼ直線的に上外方にのび、端部は先すばまりにおわる。底部の特徴や口縁部の外傾度から、平安時代初頭（9世紀初頭）の所産である。

土坑33-OO出土

土師器（25）と須恵器（26～30）がみられる。

土師器は、椀の形状に近い杯A（25）である。底部と口縁部の境が不明瞭で丸い。口縁部は強く内湾しながら上外方にのび、端部は丸くおわる。外面は、口縁部上半だけがヨコナアされ、以下は不調整のe手法である。

須恵器は、杯A、杯B、壺、甕がある。杯A（26・27）は、ともに底部付近の小片であるが、口縁部の外傾度は（26）の方がやや強い。杯B（28）は、器形のほぼ全容がわかる個体で、法量としては小形の類に属する。底部端付近に、低い高台が付く。壺（29）は、無高台の底部小片である。底部中心寄りに円弧を描く範囲で自然軸の付着が観察できるので、壺と判断できる。甕（30）は、体部上端から頸部基部にあたる。

これらは、個体数は少ないが一括遺物と判断でき、平安時代初期（9世紀初頭）の所産である。

B B-1・2区

落ち込み状遺構51-OX

土師器（31）、須恵器（32・33）、土製品（34）がみられる。

土師器は、甕（31）で、体部からゆるやかに屈曲して口縁部が外反して上方にのびる。

口縁端部は先すばまりで丸い。

須恵器には、杯と甕がある。杯（32）は、やや深く丸い底体部を呈し、口縁の立ち上がりは外反して上方にのびる。口縁端部内面には鈍い沈線状の凹部がめぐる。口縁受け部は、短く水平にのびる。甕（33）は、体部からゆるやかに屈曲して口頸部が上外方にのび、口縁端部は外面に断面三角形に拡張される。

土製品は、磁器（肥前磁器：伊万里焼）片を転用し、周縁を打ち欠いて製作された円盤（34）である。凸面には、草花文の染め付けがみられる。

これらは、（31～33）が古墳中・後期（5～6世紀前半）、（34）が江戸中期（18世紀後半）の所産である。従って、（34）が本遺構の最終埋積時期を示している可能性が強く、他は混入品である。

溝50-OS出土

陶磁器（35～41）、須恵器（42）、瓦（43～50）がみられる。

陶磁器には、碗、皿、鉢がある。碗（35）は体部外面に、皿（36・37）は底部内面および体部内面に、草花文の染め付けがみられる。（35・37）は国産磁器、（36）は肥前磁器の製品である。鉢（38～40）は、小形品（38・39）、有高台の中形品（41）、有高台の大形品（40）がある。（38）は青緑色施釉の国産青磁、（39）は黒茶褐色（鉄釉）施釉の瀬戸・美濃焼の天目茶碗、（40）は淡茶褐色（錆釉）上に暗茶褐色（鉄釉）施釉の唐津焼、（41）は淡青白色施釉の肥前磁器である。（41）の見込みには蛇の目の釉剥ぎがなされる。

須恵器は、広口壺の頸部片（42）で、外面は突帯と櫛描波状文で装飾される。

瓦には、軒平瓦、軒丸瓦、平瓦がある。軒平瓦（43）は、段頸で、瓦当面は狭く、意匠は中心飾りに宝珠を配する均整唐草文である。軒丸瓦（44～47）は、瓦当面の意匠が判明するものでは、すべて巴文と珠文を配する。巴文は表面が凸状に盛り上がり、巴尾部は長く巻き込まれる。この傾向は（44）の方が顕著である。（44）の瓦当面には、離れ砂に用いられた白雲母小片が付着する。平瓦（48～50）は、厚手（48）とやや薄手（49・50）があり、ともに凹面に布目圧痕、凸面に縄タケキ目ほかをとどめる。

これらは、（35～38・41）が江戸中期（中心は18世紀後半）、（40・45）は江戸前期（17世紀）、（43・44）が室町後期（15世紀後半～16世紀）、（39）が室町前期（15世紀）、（46）が室町時代（15～16世紀）、（48～50）が平安末～鎌倉時代（12～13世紀）、（42）が古墳中期（5世紀）の所産と推定できる。従って、（35～38・41）が本遺構の

最終埋積時期を示している可能性が強く、他は混入品あるいは伝世品や古い材料等の流用品である。

溝 53 - OS 出土

須恵器の杯蓋、杯、高杯がみられる。杯蓋（51）は、低く平らと推定される天井部から屈曲して、口縁部が直線的に外下方にのびる。天井部と口縁部の境には低い突帯と凹線をもち、口縁端部内面には鈍い凹面がめぐる。杯（52～54）のうち、小片の（52）では、浅い底体部と短い口縁の立ち上がりに推定できる。（53・54）では、ともに深く丸い底体部を呈し、立ち上がりは長い。この傾向は（54）の方が顕著である。口縁部は、（53）ではほぼ直線的にのび端部に鈍い段をもち、（54）では屈曲しながらのび端部はややシャープな内傾面をもつ。受け部はともに短いが、（53）ではほぼ水平に、（54）ではやや上方にのびる。高杯（55）は、短脚形態に復原でき、脚端部は内下方に拡張され、方形のスカシ孔が穿たれる。

これらは、古墳中～後期（5世紀末～6世紀後半：須恵器型式でTK23～43式前後）の所産である。このうち最も新しい特徴をもつ（52）が本遺構の最終埋積時期を示している可能性が強く、他は混入品あるいは埋積途中の包蔵品である。

土坑 118 - OO 出土

須恵器の甕（56）がある。体部から屈曲して、口頸部が外反しながら上外方にのびる。口縁部は、内湾するとともに外側に肥厚され、外面に沈線状の凹部がめぐる。

古墳後期（6世紀後半）の所産である。

土坑 121 - OO 出土

土師器の甕の口縁部（57）がある。ゆるやかに外反しながら上外方にのび、端部は外傾面をもつ。

古墳中～後期（5～6世紀）の所産である。

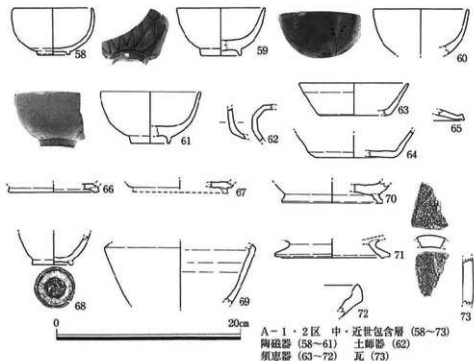
2. 包含層ほか出土（第22～25図）

（1）1993年度調査区

A-1・2区中・近世包含層出土

ここでは、本区遺構面をおおう中・近世の遺物包含層から出土した遺物の概要を記すが、そのなかには遺構面の精査時に検出した遺物も含む。

さて、本層には、陶磁器（58～61）、土師器（62）、須恵器（63～72）、瓦（73）がみられる。



第 22 図 遺物実測図・拓影-3 (包含層出土)

陶磁器は、いずれも小形の椀（58～61）である。（58）は、口縁部が強く内湾して上方にのび、体部は半球形状を呈する。底部端には、断面方形で低い高台が付く。淡灰白黄褐色施釉の、京焼写し肥前陶器である。（59～61）は、類似した形態をとる。底部の遺存する（59・60）では、底部が厚くやや長い高台が付く。3 個体とも内外面には淡青白色等の施釉がなされ、（61）の見込みには蛇の目の釉剥ぎがみられる。体外面には、（59）では網目文の、（60・61）では草花文の染め付けで飾られる。いずれも国産磁器である。

土師器は、高杯の脚裾部の小片（62）である。外面は面取り成形がなされ、遺存範囲では 4 面を数える。

須恵器には、杯 A、杯 B 蓋、杯 B、壺、摺鉢がある。杯 A（63・64）は、ともに口縁部の外傾度は比較的強い。口縁部は、（63）では直線的に、（64）ではやや外反しながら上外方にのび、（63）の端部は先すぼまりで丸い。杯 B 蓋（65）は、口縁端部の小片であり、屈曲をもたない A 形態にあたる。口縁端部は、外下方につまみ出される。杯 B（66・67）は、ともに底部付近片で、高台の取り付けられる位置は、（66）では底部端付近に、（67）では底部端より中央に寄った箇所にあたる。後者の方が古い様相を示す。壺（68～71）は、底部から体部にかけての破片である。（68）は壺 M にあたり、倒卵形の体部をも

つ小形器種である。壺Mには、①体肩部の位置が上位にあり、器高が高く、高台もやや長いタイプと、②体肩部が低く、やや器高が低く、高台が幅広く短いタイプであるが、本例は後者にあたる。(69)は、体肩部が鋭角的に屈折する。壺Kの可能性はあるが、あるいは平瓶かもしれない。(70・71)は有高台の底部片で、(70)は高台の内端で接地部となる。(71)の高台は、脚台といってよいほど長く外方にのびる。溜鉢(72)の口縁部は、外面にあわい稜をもち、端部は上方に拡張される。東播系製品である。

瓦は、丸瓦の頂部付近の小片(73)である。薄手で、凸面に縄タタキ目、凹面に布目圧痕がのこる。

これらは、(59～61)が江戸中期(18世紀後半)、(58)が江戸前期(17世紀後半)、(72)が鎌倉前期(13世紀前半)、(73)が中世、(63・64・66)が平安初期(9世紀初頭)、(62・65・67)が奈良時代(8世紀)、(68～70)が奈良時代～平安初期(8世紀～9世紀初頭)、(71)が古墳末～飛鳥時代(6世紀末～7世紀)の所産と推定できる。

B-1・2区中世包含層出土

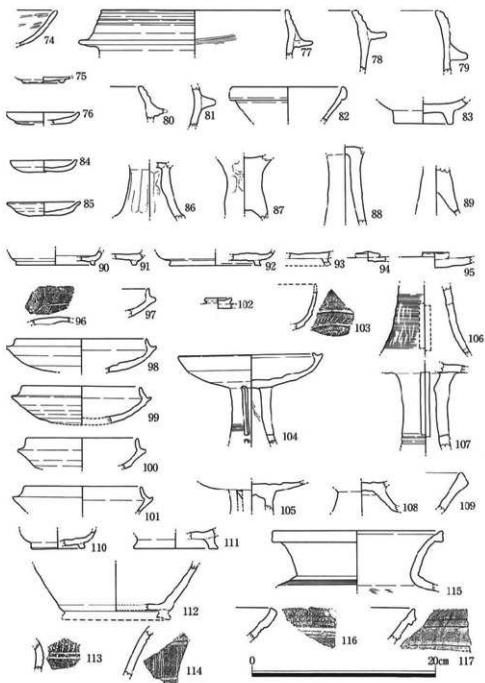
ここでは、本区の中世遺物包含層から出土した遺物の概要を記す。この包含層には、中世をさかのぼる時期の多くの遺物が含まれている。その要因は、本包含層の直下等に古墳後期の遺物包含層が存在し、遺物の出土状況からも中世段階における下層の攪乱が推定できることによる。

さて、本層には、瓦器(74～81)、白磁(82・83)、土師器(84～89)、須恵器(90～122)、瓦(123～126)、弥生土器(127)、埴輪(128)、土製品(129)、石製品(130)がみられる。

瓦器には、椀、小皿、釜がある。椀の口縁部(74)は、体部の浅い器形に復原でき、内面には粗いヘラミガキが遺存する。椀の底部(75)には、低いやや幅広くの高台が付く。小皿(76)は、外面において底部と口縁部が鈍い段差をもって区別でき、口縁端部は先ずぼまりにおわる。釜(77～81)のうち、(77～80)はいずれも内湾する口縁部の外面には2～3条の凹線が施され、その下に鋳がほぼ水平にめぐる。(81)は、体部の屈曲部付近に前者に較べて短い鋳がめぐる。

白磁には、椀(82・83)がある。体上位の破片(82)は、わずかに内湾する体部が上外方にのび、口縁部は若干下膨れ状に外側に肥厚される。底部片(83)は、厚手のやや大形品で、高台も断面台形状のしっかりしたものである。

土師器には、小皿と高杯がある。小皿(84・85)のうち、(84)は、口縁部が底部か

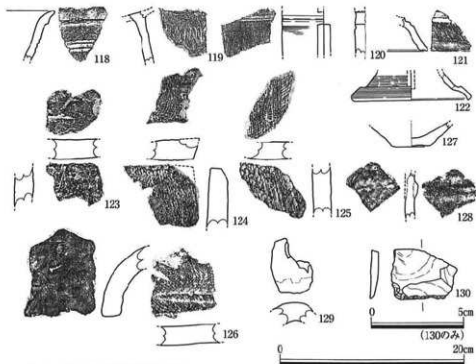


B-1·2区 中世包含層(74~117)
 瓦器(74~81) 白磁(82·83) 土師器(84~89) 須惠器(90~117)

第23图 遺物実測図・拓影-4(包含層出土)

ら上外方につまみ出されて形成され、端部は先すぼまりで丸くすなおにおわる。(85)は、やや丸い底部から口縁部が外反して上外方にのび、一段ナデ調整され、口縁端部は丸い。高杯(86~89)は、いずれも脚軸部片であるが、各種形態のものがみられる。(86)では外面にあまりシャープでない多くの面取りがあり、(87)では中実、(88)では長脚、(89)では短脚である。

須恵器には、杯B、杯B蓋、皿B蓋、杯蓋、杯、高杯蓋、高杯、摺鉢、壺、甕、器台、脚台がある。杯B(90~93)は、いずれも底部片である。高台の付く位置が、底部端にある(91)から、かなり底部中央に寄った(92)等がみられる。杯B蓋(94)は、頂部のつまみ部で、低い宝珠形を呈する。皿B蓋とした(95)も頂部付近片であり、つまみは中心が突出するが周縁より低い形態をとる。杯B蓋の可能性もあるが、大形品であるので皿B蓋と判断した。杯蓋(96)は天井部の小片であるが、外面にヘラ記号がみられる。杯(97~101)は、口縁端部がいずれも先すぼまりですなおにおわる。口縁の立ち上がりが短い(97)から、やや長い(101ほか)まであり、概して長い個体の方が底体部は深い器形に復原できる。高杯蓋(102)は、つまみ部の小片で、周縁が上外方につまみ出され中央はくはむ。高杯(103~108)は、いずれも断片であるが判明するかぎりにおいて、無蓋形態(103)、有蓋形態(104)、長脚形態(104~107)、短脚形態(108)がある。無蓋の(103)の杯部外面は、櫛歯工具による斜位刺突文で装飾される。長脚の個体は、推定2段の方形スカシ孔を備え、いずれも3方向穿孔である。摺鉢(109)は、(72)と同巧の東播系製品であるが、(72)に較べて、口縁端の肥厚も少なく、つくりもシャープである。壺(110~113)には、底部付近片(110~112)と体部片(113)がある。前者はいずれも有高台で、小形品(110)、中形品(111)、やや大形品(112)がみられる。(110)の体部は丸い形態に復原でき、遺存範囲の内面全体に灰緑色自然釉が厚く付着するので、口頸部の広い個体と推定できる。体部片(113)の外面には、2条の沈線の上位に斜位でやや長い刺突文が施される。甕(114~117)は、いずれも口頸部片にあたる。大形品の頸部(114)の外面は、水平沈線間に縦位沈線文で装飾される。頸部の全容が判明する(115)は、体部から屈曲して頸部がゆるやかに外反してのび、口縁端部は断面三角形に外側に拡張される。口縁部(116)は、端部が受け口状を呈し、その下位外面には斜位の沈線文がみられる。同じく(117)は、かなり大形品に復原でき、端部は外側に肥厚される。器台には、口縁部(118)、脚筒部上端(119)、同中位(120)がある。いずれも外面は、櫛歯波状文で加飾される。(118)は、深い杯部に推定でき、口縁端部は先す



B-1・2区 中世包含層 (118~130)

須恵器 (118~122) 瓦 (123~126) 弥生土器 (127) 埴輪 (128) 土製品 (129) 石製品 (130)

第24図 遺物実測図・拓影-5 (包含層出土)

はまりにおわり、端部直下の外面には突帯がめぐる。(119)には2方向以上の、(120)には2方向2段以上の方形スカシ孔が穿たれる。脚台は2個体(121・122)図示できた。(121)の外面には、沈線下に櫛描波状文が施されるが、施文は極めて弱く、一瞥だけでは文様の存在に気付かないほどである。(122)の脚端部は強く内湾し、その上位には方形スカシ孔の一端がかろうじて遺存する。ともに台付き壺類の脚台になる可能性があるが特定できない。

瓦には、平瓦、丸瓦がある。平瓦(123~125)のうち、遺存状態の良い個体では、凹面に布目圧痕、凸面に縄タタキ目がある。(124)の凸面には、離れ砂と推定できる小円礫がまばらに表面に付着する。丸瓦(126)では、凹面は布目圧痕をとどめるが、凸面はていねいにナデ調整される。

弥生土器とした(127)は、壺の底部にあたる。胎土等の特徴から古墳初頭の土師器である可能性もある。

埴輪は、普通円筒片(128)であり、低平な突帯がめぐる。A-1区の段状遺構8-OX

出土の埴輪片と同様に小形品であり、かつ突帯の様相も近似するが、やや胎土が異なるようで注意される。

土製品は、ふいご羽口(129)である。先端付近片で、二次被熱によって、外面は暗灰～黒褐色に、内面は淡赤橙色に変色する。

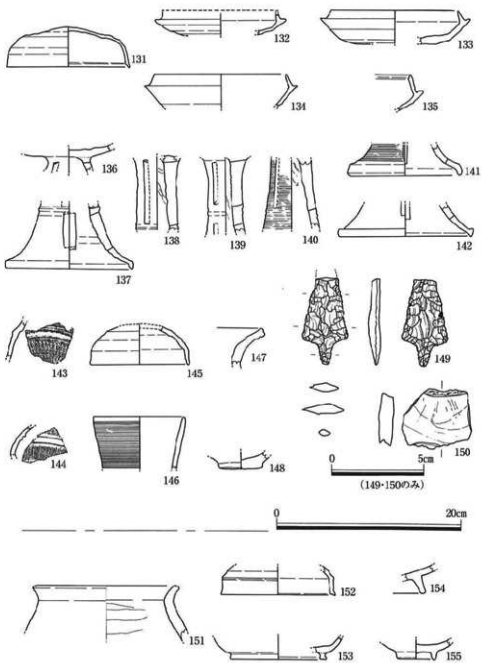
石製品は、サヌカイト製の剥片(130)である。石核から連続的に剥離された、横長剥片の2側面に調整小剥離が加えられている。

これらは、(81・126)が室町時代(15～16世紀)、(77～80)が室町前期(15世紀)、(74～76・84・85)が鎌倉後期～南北朝期(12世紀後半～13世紀)、(124・125)が平安後期(11～12世紀)、(82・83・109)が平安末前後(12世紀前後)、(90・91・94)が平安初期(9世紀初頭)、(92・93・95・110～112)が奈良時代(8世紀)、(86)が飛鳥時代(7世紀)、(89)が古墳前期(4世紀)、(87・88・96～108・113～122)が古墳中～後期(5世紀末～6世紀、6世紀後半：須恵器型式ではTK43が中心)、(128)が古墳後期(6世紀前半)、(127)が弥生末前後(3世紀後半)、(130)が不明確ながら縄文時代～弥生中期の所産であろう。

B-1・2区古墳後期包含層出土

須恵器(131～147)、弥生土器(148)、石製品(149・150)がみられる。

須恵器には、杯蓋、杯、高杯、甌、壺蓋、直口壺、甕がある。杯蓋(131)は、やや丸みをおびるが平らに近い天井部から、明瞭な稜をもたずゆるやかに屈曲して、口縁部が下方にのびる。口縁端部内面には鈍い凹面を備える。杯(132～135)には、底体部が浅く口縁の立ち上がりが短い(132)から、深く長い(135)まで各種がある。(135)の口縁端部内面には、鈍い沈線状の凹部がめぐる。高杯(136～142)には、短脚形態(136)と長脚形態(137～142)の二者があり、後者の方が多い。スカシ孔はいずれも方形ないし台形で、(136)では3方向で推定1段、(137～140)では3方向2段である。(141・142)ではスカシ孔数は判明しない。なお、(141)は、高杯ではなく、壺等に付く脚台である可能性もある。甌(143・144)は、ともに頸部にあたり、突帯と髷播波状文でいねいに裝飾される。突帯や文様は(143)の方がシャープで精緻である。壺蓋(145)は、丸い天井部から屈曲して口縁部がほぼまっすぐ下方にのび、口縁端部は丸く素直におわる。直口壺(146)は、口頸部の破片である。ゆるやかに湾曲しながら上外方に立ち上がり、口縁端部は丸い。甕の口縁部とした(147)は、口縁端部外面が肥厚され、1条の沈線状の凹部がめぐる。形態にやや疑問が残るので、あるいは脚台になる可能性も否定できない。



B-1・2区古墳後期包含層 (131~150) B-1・2区その他 (151~155)
 須恵器 (131~147, 151~154) 弥生土器 (148) 石製品 (149・150) 陶磁器 (155)

第25図 遺物実測図・拓影-6 (包含層・その他出土)

弥生土器は、甕の底部（148）にあたる。底面は下方に突出して形成される。形態だけでは壺と峻別がむずかしいが、外表面が二次被熱によって変色しているため、甕と判断した。

石製品には、サヌカイト製の有茎尖頭器（149）と剥片（150）がある。（149）の腹面の調整は概して粗く、中央右寄りの一部に主剥離面を残している。素材は横長剥片で、打点は、調整剥離によって失われているが、腹面よりみて左側縁中央にある。背面の調整剥離は右側縁に顕著であるが、左側縁では縁辺付近に微細なステップが生じて完全には形成されていない。（150）は、何ら調整剥離のなされていない横長の剥片である。主剥離面の側面や裏面に多くの自然礫面を遺存したままなので、自然礫の表端に近い部位にあたる。また、打点調整もなされずに剥離されている。

これらは、（131～147）が古墳後期（6世紀、同後半：須恵器型式ではTK43が中心）、（148）が弥生後期（3世紀）、（150）は特定できないが縄文～弥生中期、（149）が旧石器時代終末～縄文草創期の所産であろう。

B-1・2地区その他出土

ここでは、上記した遺構や包含層以外からの出土品や、調査用備溝の掘削時出土のため所属層が特定できない資料を扱う。

土師器（151）、須恵器（152～154）、陶磁器（155）がみられる。

土師器は、外面に煤の付着が観察されたので甕と推定した個体（151）である。口縁部が体部から「く」字形に屈曲して上外方にのび、口縁端部には鈍い外傾面をもつ。体部内面にはヘラケズリ調整がなされているが、焼き焼成がなされたのか内面全体が黒色土器Aのように黒色を呈する。

須恵器には、杯蓋、杯B、脚台がある。杯蓋（152）は、丸いと推定できる天井部から屈折して口縁部が下方にのび、境にはややシャープな突帯がめぐり、口縁端部内面には段を備える。杯B（153）は、底部と口縁部の境が丸く不明瞭で、高台は底部端よりやや内側に付く。脚台（154）は、長い高台状のものである。

陶磁器は、碗の底部付近片（155）で、やや細く長い高台が付き、高台内面には、重ね焼き時の融着防止用の砂目が部分的に付着する。体部の内外面に青緑色の施軸がなされる。国産青磁である。

これらは、（155）が江戸中期（17世紀）、（151）が平安末（12世紀頃）か、（153）が奈良時代（8世紀）、（152・154）が古墳後期（6世紀）の所産であろう。

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査対象地は、一帯が早くから宅地化されていたため今日まで殆ど調査対象とはならなかった。しかし丘陵末端の緩斜面から平坦地に位置していたため、それぞれの土地利用の在り方を探るうえで貴重な成果を得ることができた。以下2次にわたる調査成果を列記して、まとめとする。

今回の調査で得られた最古の遺構・遺物は、B区出土の有茎尖頭器であろう。和泉市教育委員会による伯太北遺跡内の調査では、ナイフ形石器・有舌尖頭器が出土したという。また若干量の弥生土器片も見つかったが、当該期の遺構は皆無であった。つまり、古墳時代をさかのぼる積極的な営為の痕跡は認められなかったのである。

B区では古墳時代後期の遺構や遺物包含層を検出したことから、調査地西半に同期の集落が展開するものと推測する。またA区では、川西編年のⅣ～Ⅴ期に属する埴輪片が、さらにその東方約75mの地点に設定した試掘トレンチでも、6世紀前半の円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪が出土した。これらのことから、かつて同期の古墳が存在した可能性が極めて高い。

古代になると、A-1区ならびに1992年度調査区というやや高所において、奈良・平安時代の掘立柱建物をはじめとする遺構を検出し、中世（主体は13世紀か）においても、A区・1992年度調査区で建物跡などを確認した。またこの段階では、傾斜地をいくつかの平坦面に造成して、畑地に利用していたらしい。

古代・中世の土器に混じり、若干量ではあるが少なくとも平安時代にさかのぼる平瓦片や室町時代の軒瓦が出土した。出土量から判断して、調査区内もしくはごく隣接した場所に寺院があったとは到底考えられないが、例えば400mほど南にある伯太神社の神宮寺などで使用された瓦の可能性もある。

- (註1) 主として中世以降の遺物の評価にあたっては東大阪市教育委員会福永信雄氏、大阪府立弥生文化博物館地村邦夫の両氏からご教示を得、有茎尖頭器の図化および記載にあたっては当センター西村参氏からご援助を受けた。深謝申し上げたい。
- (註2) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究室『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第16冊 1943年）
佐原真「畿内地方」（『弥生式土器集成』本編2 1968年）
田辺昭三『陶邑古窯跡群』I（平安学園考古クラブ 1966年）
田辺昭三『須恵器大成』（角川書店 1981年）
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』54-2・4 1978・79年
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 1976年
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅺ 1982年
秋山浩三ほか「長岡京跡左京第120次（7ANFZN-2地区）～二条大路・東二坊第一小路・東二坊坊間小路交差点～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』18 1986年
橋本久和「上牧遺跡」1980年
伊能近富「中世土器研究に関する基礎文献（1）」（京都考古刊行会『京都考古』54 1990年）に示された各種文献

第1表 出土遺物観察表

挿図・図版番号は第20～25図、図版10～13のもの

※最大粒度長、()内は普通のものの中での大形粒度長

※単石：石英、長：長石、チ：チャート、雲：黒雲母、赤：赤色炭粒、角：角閃石、片：結晶片岩、

白：白色粒、黒：黒色粒、原則として量の多い順に表記

調整・手法は原則として、先行するものから表記

調査年度	遺物名ほか	遺物種類	挿図・図版No.	形状・寸法:cm ():測定、 ():既出 口径 器高 底脚径	色調 外面 器内面	加土 雲質/炭粒等の量/ 鉱物等の種類(※)/ 鉱物等の種類(※※)	調整・手法 (※※※) ・外面 ・内面	焼成 硬度 遺存 状態	片径 口縁 底脚	備考	
1992	21-OF	土師器	1	杯A	[19.6] (3.2) -	褐色～赤茶褐色 淡褐色 淡褐色	やや粗/少し/1(0.5) mm/長・赤・雲	・不調整、ナデ、ヨコナ デ ・ナデ、ヨコナデ	硬良	1/4 極小	
			2	椀	- (1.6)	褐色 灰白色 褐色	緻密/少し/2(0.5) mm/白(石)	・不調整、ナデ ・ナデか	やや軟 やや劣	- 極小	A-1区出土
1993	8-9-9	瓦器	3	釜	[25.7] (4.25) -	褐色 灰白色 黒～暗灰色	粗/やや多い/3(1) mm/白(石・長)	・ナデか ・ナデか	硬劣	極小 -	A-1区出土、 外面に覆付着
			4	高杯	- (3.7) -	橙茶褐色 橙茶褐色 橙茶褐色	緻密/少し/3(0.5) mm/長・チ	・ヘラケズリ(面取り) ・ナデ	やや軟劣	-	A-1区出土
1993	原形器	土師器	5	杯A	- (1.8) (9.6)	淡灰白色 淡灰白色 淡灰白色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(長・石)・黒	・回転ナデ、回転ヘラケ ズリ ・回転ナデか	やや軟 やや劣	1/8	A-1区出土、 外表面は自然軸 で暗灰色化
			6	杯B	- (1.45) (7.2)	暗灰色 淡灰色 淡灰色	緻密/ほとんどなし/1 (0.5)mm/白・黒	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬良	- 1/4	A-1区出土、 体外面は自然軸 で暗灰色化、内 面に灰白色自然 軸付着
1993	原形器	土師器	7	杯B	- (1.3) (8.7)	淡灰色 灰青・淡灰色 淡青灰色	やや粗/やや多い/5(1) mm/長(石)・黒	・回転ヘラおこし、回 転ナデ、ナデ ・回転ナデ	硬良	- 1/5	A-1区出土、 外面は自然軸で 暗灰色化
			8	壺 (N小)	(0.4)	淡青灰色 濃灰・青灰色 灰青色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(石・長)	・ナデか ・回転ナデ	硬良	-	A-1区出土、 外面に灰白色自然 軸付着
1993	原形器	土師器	9	壺	- (1.6) (5.8)	灰～暗灰色 淡青灰白灰 淡青灰白色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(石・長)・黒	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ	硬良	極小 1/5	A-1区出土、 外面は自然軸に よって暗灰色化
			10	壺また は鉢	(4.4)	淡灰色 緑灰～灰白灰 淡灰色	やや粗/やや多い/2(1) mm/白(長)・黒	・ナデか ・回転ナデ	やや軟 やや劣	-	A-1区出土、 傾き等やや不確 定、首継系土器 の可能性ありか
1993	原形器	土師器	11	円筒	(4.0)	淡褐色 淡褐色 淡褐色	やや粗/少し/2(0.5) mm/赤・長・石	・不明 ・不明	やや軟 劣	-	A-1区出土
			12	円筒	(4.2)	淡褐色 淡褐色 淡褐色	やや粗/少し/2(0.5) mm/チ(灰色)・赤・長	・不明 ・不明	硬劣	-	A-1区出土
			13	円筒	(4.3)	暗黒～暗茶褐色 橙茶褐色 灰褐色	やや粗/少し/3(0.5) mm/長・石・赤	・不明 ・不明	硬劣	-	A-1区出土
			14	円筒	(4.9)	淡褐色 淡褐色 淡褐色	やや粗/少し/3(0.5) mm/赤(多)・石・長	・ナデ ・ナデか	やや軟 劣	-	A-1区出土
			15	円筒	(4.8)	淡褐色 淡褐色 淡褐色	緻密/少し/2(0.5) mm/チ(灰色)・石・長	・タテハケ ・ナナメハケ、ナデ	やや軟 やや劣	-	A-1区出土
			16	円筒	(3.2)	淡褐色 淡褐色 淡褐色	やや粗/少し/2(0.5) mm/赤・長・チ(灰色)	・タテハケ(タテハの可能 性あり)、ナナメハケ ・ナナメハケ、ナデ	硬 やや劣	-	A-1区出土
			17	円筒	(3.9)	淡褐色 淡褐色 淡褐色	緻密/少し/3(1)mm/ 長・赤・石	・タテハケ ・ナナメハケ、ナデ	やや軟 やや劣	-	A-1区出土

調査年度	遺物種別	種類	器種	法量:cm () : 直径 () : 口径 () : 高さ () : 底径	色調 外表面 内表面	胎土 需量/底物等の量/ 底物等の粒度(φ)/ 底物等の種類(※※)	調整・手法 (※※※)	焼成 程度	状態	用途	備考	
1-8 9 3	OX	地輪	18	朝顔形 - (3.2)	淡褐色 淡褐色 淡褐色	縦密/少し/1(0.5) mm/長・石・ナ(灰色)	・ナテハケ、ヨコナテ ・ナテハケ、ナテ	やや軟 やや劣	-	-	A-1区出土	
			19	平瓦 - 1.3 -	黒灰色 灰白色 灰白色	粗/やや多い/7(1) mm/黒・長・石	・ナテか ・春日匠痕、ヘラナヅリ	硬良	-	-	A-1区出土	
			20	丸瓦 - 4.4 -	淡黄・白褐色 白濁・淡褐色 淡黄・淡褐色	縦密/やや多い/4(1) mm/ナ・長・石・赤	・ナテか ・春日匠痕	硬良	極小 極小	A-1区出土、 二次加熱を受け 変色		
22- OS	須 土 器	21	葉 - (5.2) -	青灰色 灰青色 暗青灰色	縦密/少し/4(1)mm/ 白・(長)・黒	・扇子タナキ目、回転ナテ ・ナテキ当具痕、回転ナ テ、ナテ	硬良	-	-	A-1区出土、 外面は自然釉で 暗灰色化		
1- OS	瓦 器	22	棟 - (1.4) -	暗灰色 灰白色 暗灰色	やや粗/少し/0.5mm/ 黒・白	・不調整、ナテ ・ナテ、横ヘラミガキ	硬 やや劣	-	-	極小	A-1区出土	
		23	杯B蓋 - (1.0) -	淡灰色 淡灰色 淡灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白(長)・黒(少)	・回転ナテ ・回転ナテ	やや軟 やや劣	極小 -	A-1区出土			
33- OX	土 師 器	須 土 器	24	杯A [11.65] (3.75) [8.4]	淡青灰白色 淡青灰白色 淡青灰白色	縦密/少し/1(0.5) mm/白(石・長)・黒	・回転ナテ、ナテ ・回転ナテ	硬 良	1/7 1/4	-	-	A-1区出土、 内外面の一部に 火だすき痕あり
			25	杯A [14.8] 4.0 -	橙～淡黄褐色 赤茶褐色 橙～橙白色	縦密/少し/2(0.5) mm/長・ナ・赤	・ナテ、指匠痕、ヨコナ テ ・ナテ、ヨコナテか	硬 劣	1/4 3/4	-	-	A-1区出土
			26	杯A - (1.5) -	灰白～暗灰色 淡褐色 灰白色	縦密/やや多い/3(1) mm/黒・白(長)	・不明 ・不明	軟 劣	-	1/4 極小	-	A-1区出土
			27	杯A - (1.2) -	青灰色 濃灰色 青灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白(長)・黒	・回転ヘラおこし痕、ナ テ ・回転ナテ	硬 良	-	-	極小	A-1区出土
			28	杯B [11.4] 4.0 [8.8]	青灰～白青灰色 青灰～白青灰色 青灰色	やや粗/やや多い/8(1) mm/白(長)	・回転ヘラおこし痕、回 転ナテ、ナテ ・回転ナテ、ナテ	やや軟 良	1/5 1/5	-	-	A-1区出土
			29	皿 - (1.5) -	灰青色 灰白色 淡灰青色	縦密/少し/4(1)mm/ 黒・白	・回転ナテ、ナテ ・回転ナテ、ナテ	硬 良	-	1/4	-	A-1区出土、 燒里も、外面に 火だすきあり、 内底面中央に暗 灰色自然釉付着
			30	葉 - (2.2) -	淡灰青色 淡灰褐色 淡灰青色	縦密/少し/5(0.5) mm/白(長)・黒・赤	・扇子タナキ目、回転ナテか ・ナテキ当具痕、回転ナ テ、ナテ	硬 良	-	-	-	A-1区出土、 外面に淡黄緑色 自然釉付着
			31	葉 - (4.6) -	明青色 明青色 明青色	やや粗/やや多い/5(1) mm/長・赤	・不明 ・不明	やや軟 劣	-	-	-	B-1区出土、 傾きやや不確定
			32	杯 [11.8] (4.2) -	灰～暗灰色 灰～暗灰色 灰～暗灰色	やや粗/やや多い/5(1) mm/白(長)・石・黒	・回転ナテ、回転ヘラク ズリ ・回転ナテ	硬 良	極小 -	-	-	B-1区出土、 底面外面の一部 は自然釉で黒色 化
			33	葉 [19.8] (5.8) -	淡灰色 淡灰色 淡灰～灰白色	やや粗/やや多い/3 (0.5)mm/黒(多)・白 (長)	・回転ナテ ・回転ナテ	やや軟 やや劣	極小 -	-	-	B-1区出土、 外面の一部は白 然釉で暗灰色化
51- OX	土 師 器	須 土 器	34	瓶用円 盤 (径2.5) (厚0.6)	乳白色 乳白色 乳白色	縦密/ほとんどなし/ 0.5mm/黒	・ミガキ ・ミガキ	硬 良	-	-	B-1区出土、 磁道磁器片転用	
			35	碗 [12.0] (3.6) -	灰白色 淡灰白色 灰白色	縦密/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ナテ、ミガキ ・ナテ、ミガキ	硬 良	1/4	-	-	B-1区出土、 磁道磁器、内外 面に灰白色の施 釉
			36	皿 - (1.3) -	淡青白色 淡青白色 淡青白色	縦密/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ミガキ ・ミガキ	硬 良	-	-	-	B-1区出土、 肥前磁器、内外 面に淡青白色の 施釉
50- OS	陶 磁 器	須 土 器	37	皿 - 2.5 -	淡青白色 白色 淡青白色	縦密/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ナテ、ミガキ ・ナテ、ミガキ	硬 良	極小 -	-	B-1区出土、 国産磁器、内外 面に淡青白色の 施釉	

調査年度	通称名ほか	遺物種類	持国・国版No.	器種	法量:cm 〔〕:推定 ():真高 口径 器高 底脚径	色調		胎土	調整・手法 (※※※)	焼成 程度	相対 位置	備考	
						外面 内面	外面 内面						
1993	50-OS	内蔵器	28	鉢	〔15.9〕 (4.8)	洗青緑色	緑青/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬良	1/8	B-1区出土、 国産青磁。内外 面に洗青緑色の 施釉		
						白色							
						洗青緑色							
			29	碗	- 3.7	洗濁灰白・黒茶褐色	緻密/ほとんどなし/ 0.5mm/黒	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬良	極小	B-1区出土、 美濃・瀬戸焼、 内外面に黒茶褐 色の施釉		
						洗濁灰白色							
			40	鉢	- (5.0)	洗濁・暗茶褐色	やや粗/少し/4(0.5) mm/黒・白(長)	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬良	-	B-1区出土、 唐津焼、内外面 に暗茶褐・洗茶 褐色の施釉		
						洗濁白色							
			41	碗	- (2.1) (8.1)	洗青灰白色	緻密/ほとんどなし/1 (0.5)mm/白	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬良	-	B-1区出土、 肥前磁器。内外 面に洗青白色の 施釉。内面に重 焼き痕あり		
						洗青白色							
			42	壺	- 4.8	暗灰色	緻密/ほとんどなし/ 0.5mm/白(長)	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬 やや劣	-	B-1区出土		
						暗灰～灰色							
			元	軒平瓦	- (5.0)	洗濁灰～暗灰色	やや粗/やや多い/8(1) mm/赤・(灰色)・石	・ナデ ・ナデ	硬 やや劣	-	B-1区出土		
洗濁白色													
洗濁～暗灰色													
44	軒丸瓦	- (10.1)				黒灰～灰白色	やや粗/やや多い/8(1) mm/赤(灰色・大形)・ 石・瓦	・ナデ ・ナデ、翻転痕	硬 良	-	B-1区出土、 瓦当面に難砂用 雲母片付着		
						灰白色							
45	軒丸瓦	- 13.8				黒色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白(長)	・ナデ ・ナデ	硬 やや劣	-	B-1区出土		
						洗濁白色							
46	軒丸瓦	- 4.5				灰白色	緻密/少し/1(0.5) mm/石	・ナデ ・ナデ	硬 やや劣	-	B-1区出土、 二次加熱を受け 変色		
						灰白色							
47	軒丸瓦	- 2.7				黒色	やや粗/やや多い/10(1) mm/赤(灰色・大形)・石 (大形)・瓦	・ナデ ・ナデ	硬 やや劣	-	B-1区出土		
			灰白色										
48	平瓦	- (2.6)	淡黄褐色	緻密/やや多い/5(1) mm/赤(灰色)・瓦・石	・赤目圧痕、ナデ ・縄タタキ目、ヘラタズ リ	硬 良	-	B-1区出土、 二次加熱を受け 変色					
			淡黄褐色										
49	平瓦	- (3.2)	暗灰色	緻密/多い/6(1)mm/ 黒(多)・長・赤(灰色)	・赤切り痕 ・縄タタキ目	硬 良	-	B-1区出土、 凹凸面ともに難 砂付着					
			暗灰色										
50	平瓦	- (2.1)	灰褐色	緻密/やや多い/10(1) mm/長・石・赤(灰 色)・赤	・赤切り痕、ナデ ・縄タタキ目、部圧痕	硬 やや劣	-	B-1区出土、 凸面に難砂付着、 二次加熱を受け 一部変色					
			暗灰色										
53-OS	須恵器	51	杯蓋	〔13.8〕 (3.0)	暗灰色	やや粗/やや多い/5 (0.5)mm/白(長)・黒	・回転ナデ、回転ヘラタ ズリ ・回転ナデ	硬 やや劣	極小	B-1区出土、 外面に暗緑褐色 自然釉付着			
					灰褐色								
					青灰色								
					52	杯	- (2.0)	暗緑灰色	緻密/少し/5(0.5) mm/黒・白	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	-	B-1区出土、 外面に灰白色自 然釉付着
								暗緑灰色					
53	杯	11.0 4.8	青灰～暗灰色	やや粗/やや多い/3 (0.5)mm/白(石・ 長)・黒	・回転ナデ、回転ヘラタ ズリ ・回転ナデ、ナデ	硬 良	3/4 3/4	B-1区出土					
			暗灰～灰色										
54	杯	〔10.5〕 4.2	暗青灰色	緻密/少し/2(0.5) mm/白(石)・黒	・回転ナデ、回転ヘラタ ズリ ・回転ナデ	硬 良	1/8	B-1区出土					
			洗灰色										
55	高杯	- (2.9) (8.7)	青灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	-	B-1区出土、 外面に灰白色自 然釉付着					
			青灰色										
118-OO	須恵器	56	壺	〔16.4〕 (7.1)	暗青灰色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(石)・瓦	・平行タタキ目、回転ナ デ ・タタキ当具痕	硬 良	極小	B-2区出土、 口縁端外面に灰 白色自然釉付着			
					暗青灰～洗灰色								

調査年度	遺物種別	神田・墨江 No.	器種	法量:cm () :測定, () :口徑 () :底脚径	色調 外 面 内 面	胎 土 素質/疵物等の量/ 疵物等の粒状 (φ) / 疵物等の種類 (φ)	調整・手法 (出所)	焼成 程度 遺存 状態	形状 口径 底脚	備 考	
1990	土器類	A11-1-2区中・近世包含層	57	甕	[19.3] (3.6) -	淡褐色 淡褐色 淡褐色	緻密/少し/4(11mm)/ 長・赤・赤	・ナデ、ヨコナデか ・ヨコナデか	硬劣	1/4 -	B-2区出土
			58	碗	(8.5) 5.2 [3.4]	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	やや粗/ほとんどなし/ 0.5mm/黒	・回転ヘラケズリ ・ナデ、ミガキ	やや軟 良	1/2 5/6	A-1区出土、 宮城写し肥田用器、 内外面に淡灰白黄褐色の施釉
			55	碗	[9.4] 5.3 [4.4]	淡青白色 淡青白色 淡青白色	緻密/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬良	極小 1/2	A-1区出土、 国産磁器、内外面に淡青白色の施釉
	土器類	A11-1-2区中・近世包含層	60	碗	[10.2] (5.0) -	暗青灰～暗赤緑色 暗青灰～暗赤緑色 暗青灰～暗赤緑色	緻密/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬良	1/3 -	A-1区出土、 国産磁器、内外面に暗青灰～暗赤緑色の施釉
			61	碗	[11.0] 5.6 [4.2]	乳青白色 白色 乳青白色	緻密/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬良	1/3 1/3	A-1区出土、 国産磁器、内外面に乳青白色の施釉、 内底面に重ね焼痕あり
			62	高杯	- (3.8) -	赤褐色 茶褐色 赤褐色	緻密/少し/2(0.5) mm/長(多)・赤	・不明 ・ナデ	軟劣		A-1区出土
			63	杯A	[11.8] (3.5) (7.9)	灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/2(1) mm/白(石・長)・黒	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ	やや軟 良	1/8 極小	A-1区出土
			64	杯A	- (2.8) [8.4]	暗青灰色 淡青灰色 暗青灰色	緻密/少し/2(0.5) mm/黒・白(長)	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬良	- 1/6	A-2区出土
	土器類	A11-1-2区中・近世包含層	65	杯B蓋	- (1.1) -	青灰色 青灰色 青灰色	やや粗/少し/3(0.5) mm/白(長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟 良	極小 -	A-2区出土
			65	杯B	- (1.0) [9.8]	灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/黒・白(長)	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟 良	- 極小	A-1区出土
			67	杯B	- 9.7 -	灰～暗灰色 灰色 灰色	緻密/少し/2(0.5) mm/白(長)	・回転ナデ ・ナデ	やや軟 良	- -	A-1区出土
68			器M	- 3.5 4.9	淡灰色 淡灰色 淡灰色	緻密/少し/4(0.5) mm/黒・白(石・長)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ、 爪先痕 ・ナデ	硬良	- 1/1	A-1区出土、 外面の一部は自然釉で 暗灰色化	
69			甕 (Kカ)	- (6.5) -	暗青灰～暗灰色 淡黄色 青灰色	緻密/少し/3(1)mm/ 白(長・石)	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬良	- -	A-1区出土、 体上外面に淡褐色の 自然釉付着、 平版の可能性あり	
70			甕	- [2.4] [10.9]	淡青灰色 暗灰色 淡青灰色	緻密/少し/2(0.5) mm/白(石・長)	・回転ヘラおこし痕、 回転ヘラナデ ・回転ナデ	硬 やや劣	- 極小	A-1区出土	
71			甕	- (1.9) [11.2]	灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白(長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟 良	- 1/4	A-1区出土	
72			摺鉢	- (2.5) -	暗青灰色 暗青灰色 暗青灰色	粗/少し/2(0.5)mm/ 黒・白(石・長)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	極小 小	A-1区出土、 口縁外面に黒灰色 自然釉付着	
73			瓦	- (1.3) -	黒灰色 淡褐色 黒灰色	緻密/少し/2(1)mm/ 石・長・ナ(灰色)	・縄テタキ目 ・布目圧痕か	軟劣	- -	A-1区出土	
B-1-2区中 近世包含層			瓦器類	74	碗	- (4.0) -	黒灰色 灰白色 黒灰色	緻密/ほとんどなし/1 (0.5)mm/赤	・不調整、ナデ ・ナデ、覆ヘラシ	軟劣	極小 小
	75	碗		- (0.7) 4.2	黒灰色 灰白色 黒灰色	やや粗/ほとんどなし/ 1(0.5)mm/黒	・ナデか ・不明	やや軟 良	- 1/2	B-1区出土	

調査年度	遺構名ほか	遺物種類	母国・国版No.	器種	法量:cm 〔〕:推定、 ():珙高 口徑 器高 底脚径	色調 外 面 内 面	胎土 素質/底物等の量/ 底物等の粒度(中)/ 底物等の種類(中)	調査・手法 (中※中) ・外 ・内 ・面	焼成 硬度 遺存 状態	片割 口縁 底脚	備考																																																																								
1999・2区中世包含層	日11-3	瓦器	76	小皿	〔7.9〕 1.3 —	黒灰色 灰色 黒灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/黒・赤	・ナデ、ヨコナデ ・ナデ、ヨコナデ	やや軟 やや劣	1/6 —	B-1区出土																																																																								
												77	朝釜	〔19.6〕 (4.9) —	黒灰色 淡褐色 黒褐色	粗/少し/2(1)mm/ 長・石・チ(灰色)	・ナデ ・ハケメ、ナデ	硬 劣	1/6 —	B-2区出土、 外面に煤付着																																																															
																					78	朝釜	〔25.4〕 (6.6) —	黒灰色 灰白色 灰白色	粗/少し/3(1)mm/白 (石・長)	・ヘラケズリ、回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬 やや劣	1/6 —	B-1区出土																																																						
																														79	朝釜	〔34〕 (6.8) —	黒灰色 灰白色 黒灰色	やや粗/少し/4(0.5) mm/チ(灰色)・石	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	やや軟 良	極小 —	B-1区出土、 内外面に乳白色に 煤付着																																													
																																							80	朝釜	— (3.7) —	黒灰色 灰白色 灰白色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(石・長)・黒 (チ)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 劣	極小 —	B-2区出土																																				
																																																81	朝釜	— (4.5) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰色	やや粗/少し/3(0.5) mm/白(長)・チ(灰色)	・ナデか ・ナデか	やや軟 劣	— —	B-1区出土、 外面に煤付着																											
																																																									白磁	82	碗	〔12.4〕 (3.8) —	乳白色 白色 乳白色	緻密/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬 良	1/9 —	B-2区出土、 内外面に乳白色の 釉粒																	
																																																																			83	碗	— (2.6) (6.4)	乳灰褐色 乳灰褐色 淡灰緑白色	緻密/ほとんどなし/ 1(0.5)mm/白	・回転ヘラケズリ ・ナデ、ミガキ	硬 良	1/2 —	B-1区出土、 体外面の一部と 内面に淡灰緑白色 の釉粒								
																																																									土器器	84	小皿	〔7.4〕 1.7 —	淡黄灰褐色～ 明淡赤褐色 淡黄灰褐色～ 明淡赤褐色 淡黄灰褐色～ 明淡赤褐色	緻密/少し/2(0.5) mm/石・黒・長	・ナデか ・ナデか	やや軟 劣	1/4 —	B-2区出土																	
																																																																			85	小皿	〔4.0〕 (1.5) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	やや粗/少し/2(0.5) mm/赤・長・チ(灰色)	・不明 ・不明	やや軟 劣	1/6 —	B-2区出土								
																																																																												86	高杯	— (5.9) —	淡褐色～淡褐色 淡赤褐色 淡褐色～淡褐色	緻密/少し/2(0.5) mm/長	・ナデか ・しびり目、ナデ	やや軟 劣	— —
	87	高杯	— (6.8) —	淡橙白褐色 淡橙白褐色 淡橙白褐色	やや粗/少し/6(1) mm/長・赤	・ナデ、指任せ ・ナデか	硬 劣	— —	B-2区出土																																																																										
										88	高杯	— (8.3) —	淡橙白色 淡橙白色 淡橙白色	緻密/少し/2(1)mm/ 赤(多)・石・長・チ(灰 色)	・ナデか ・ナデ	やや軟 劣	— —	B-2区出土																																																																	
																			89	高杯	— (5.0) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	緻密/少し/2(0.5) mm/石・長・赤	・不明 ・不明	やや軟 劣	— —	B-2区出土																																																								
																												須恵器	90	杯B	— (1.7) —	灰色 灰色 灰色	緻密/少し/1(0.5) mm/白・(長)	・回転ナデ、ナデ ・ナデ	やや軟 やや劣	1/7 —	B-2区出土、 外面の一部は自然 釉で暗灰色化																																														
																																						91	杯B	— (1.6) —	灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/黒・白(長)	・回転ナデ ・ナデ	やや軟 やや劣	極小 —	B-2区出土																																					
																																															92	杯B	— (1.6) 10.0	暗灰色 灰～黄灰色 淡青灰色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(長)・石	・回転ヘラおこし痕、回 転ナデ、ナデ ・回転ナデ	硬 良	1/6 —	B-2区出土二																												
																																																								93																											
																																																									94	杯B蓋	— (1.1) —	灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(長)	・回転ナデ ・ナデ	やや軟 良	— —	B-1区出土																		
																												95	皿B蓋	— (1.7) —	灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/3(0.5) mm/白(長)・石・黒	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬 良	— —	B-1区出土、 外面に灰褐色自然 釉付着																																															

調査年度	遺構名はか	遺物種類	母遺・遺取No.	器種	法量:cm ()測定、 ()口徑 ()高さ ()底径	色調 外 面 内 面	胎土 素質/底物等の量/ 底物等の粒度(φ)/ 底物等の種類(※※)	調整・手法 (※※※) ・外 面 内 面	地成 硬度 遺存 状態	埋没 口縁 底脚	備考	
1993	B-1・2区中世包含層	信重器	96	杯蓋	— (0.7) —	暗灰～灰色 灰紫色 淡青灰色	緻密/少し/2(0.5) mm/白(長・石)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬良	—	B-2区出土、 外側にヘラ記号あり	
			97	杯	[12.2] (3.05) —	暗青灰色 灰色 暗青灰色	やや粗/少し/3(1) mm/白(石・長)・黒	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	やや軟良	狭小	B-2区出土	
			98	杯	[14.3] (3.6) —	淡灰紫色 淡赤紫色 青灰色	緻密/少し/2(0.5) mm/白(石・長)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬良	狭小	B-2区出土、 底縁部外側にヘラ記号あり	
			99	杯	[13.0] (4.0) —	青灰色 紫褐色 青灰色	緻密/少し/5(1)mm/ 白(石・長)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	硬良	1/4	—	B-2区出土
			100	杯	[12.0] (3.4) —	灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白(長・石)・黒	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	やや軟良	1/8	狭小	B-1区出土
			101	杯	[13.0] (2.8) —	淡青灰色 淡灰褐色 淡青灰色	緻密/少し/2(1)mm/ 白(石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	1/7	—	B-2区出土、 体外面に淡灰褐色自然釉付着
			102	高杯蓋	— (1.1) —	青灰色 青灰色 青灰色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(長・石)・黒	・回転ナデ ・ナデ	やや軟良	—	—	B-1区出土
			103	高杯	— (4.1) —	暗灰色 暗灰色 青灰色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(長・石)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	—	—	B-2区出土、 内面の一部に灰褐色自然釉付着
			104	高杯	— (9.5) —	紫灰色 淡紫灰色 青灰色	緻密/少し/2(0.5) mm/白(長・石)	・回転ナデ、オキメ、回転ヘラミガキ、ナデ ・回転ナデ、しほり目、ナデ	硬良	—	—	B-2区出土
			105	高杯	— (3.3) —	暗灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/3(0.5) mm/白(長)・石	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ、タタキ当具皿、ナデ	硬良	—	—	B-2区出土、 外面に一部は自然釉で暗灰色化
			106	高杯	— (7.5) —	赤紫茶色 赤紫茶色 赤紫茶色	緻密/少し/3(1)mm/ 白(石・長)・赤(茶色)	・オキメ ・回転ナデ	硬良	—	—	B-1区出土
			107	高杯	— (9.1) —	暗灰色 灰黄色 暗灰色	緻密/少し/5(1)mm/ 白(長・石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ、しほり目、ナデ	硬良	—	—	B-2区出土、 外面は自然釉で暗灰色化
			108	高杯	— (3.4) —	灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(長・石)・赤(灰色・赤色)・黒	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ、ナデ	やや軟良	—	—	B-1区出土
			109	摺鉢	— (4.4) —	淡灰色 淡灰色 淡灰色	やや粗/少し/8(1) mm/白(長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	狭小	—	B-1区出土、 口縁外側に黒灰色自然釉付着
			110	盞	— (2.1) (5.4)	暗灰色 紫灰色 暗青灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白(長・石)	・回転ヘラおこし肌、回転ナデ ・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	1/2	—	B-1区出土、 内面に灰褐色自然釉付着
			111	盞	— (2.3) (9.1)	淡灰色 淡灰色 淡灰色	やや粗/少し/2(1) mm/黒・白(長)	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	やや軟良	1/4	—	B-2区出土
112	盞	— (5.2) —	淡灰色 灰褐色 淡灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/黒	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬 やや軟	—	—	B-2区出土			
113	盞	— (3.3) —	暗灰色 淡青灰色 淡青灰色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	やや軟良	—	—	B-1区出土			
114	盞	— (5.4) —	暗灰色 灰色 暗灰色	やや粗/少し/3(1) mm/黒・白(長・石)・赤	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	—	—	B-2区出土、 外面に黒灰色自然釉付着			
115	盞	[18.6] (6.5)	淡灰色 淡灰色 淡灰色	緻密/やや多い/4(1) mm/黒(多)・白(長)	・回転ナデ、オキメ ・タタキ当具皿、回転ナデ	やや軟良	1/4	—	B-2区出土			
116	盞	— (3.5) —	淡灰色 淡灰色 暗灰色	やや粗/少し/2(0.5) mm/白(長・石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟良	狭小	—	B-2区出土			

調査年度	遺構名はか	遺物種類	押固・図版No.	器種	法量:cm 〔〕:測定 〔〕:残高 口径 器高 底脚径	色調	胎土	調整・手法 (※※※)	焼成 硬度	片厚 口縁 底脚	備考		
												外 断 面	素質/磁鉄等の量/ 灰質等の程度(※)/ 灰質等の種類(※※)
1999	B11・2区中供包含層			117	差	- (3.7)	紫灰色 灰紫色 灰紫色	緻密/少し/8(1)mm/ 白(長)	・回転ナデか ・回転ナデか	硬 やや劣	極小 -	B-2区出土、 外面に暗緑褐色 自然釉付着	
				118	器台	- (5.2)	淡青灰色 淡青灰色 暗灰色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白(長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 やや劣	極小 -	B-1区出土、 外面に灰緑褐色 自然釉付着	
				119	器台	- (5.5)	青灰色 灰色 灰色	やや粗/少し/3(1) mm/黒(多)・白(長)	・回転ナデ ・ナデ	やや軟 良	-	-	B-1区出土
				120	器台	- (4.8)	淡青灰色 暗青灰色 淡青灰色	やや粗/少し/11(1) mm/白(長)・黒	・回転ナデ、カキメ ・ナデ	硬良	-	-	B-1区出土、 外面の一部に黒灰 緑色自然釉付着
				121	(脚台)	- (3.7)	暗灰色 紫灰色 暗青灰色	緻密/少し/2(1)mm/ 白(長)・赤	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	-	極小	B-1区出土、 外面の一部に灰 白色自然釉付着
				122	(脚台)	- (2.9) (12.4)	暗灰色 淡褐色 淡褐色	やや粗/少し/1(0.5) mm/白(長)・黒	・カキメ、回転ナデ ・回転ナデ	硬良	-	1/6	B-2区出土、 外面は自然釉で 暗灰色化
				123	平瓦	- (1.2)	灰色 灰色 灰色	やや粗/やや多い/3(1) mm/白(長)・黒・チ (灰色)	・不明 ・不明	やや軟 劣	-	-	B-1区出土
				124	平瓦	- (2.2)	濃灰色 濃灰色 濃灰色	やや粗/やや多い/2(1) mm/長・チ(灰色)・石	・春日庄痕、ナデ ・縄タタキ目	硬良	-	-	B-2区出土、 凸面に黒砂遺の 小凹跡付着
				125	平瓦	- (1.9)	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色～灰色	緻密/少し/3(0.5) mm/チ(灰色)・長・石	・春日庄痕、ナデ ・縄タタキ目	やや軟 良	-	-	B-2区出土、 二次加熱を受け 変色
				126	丸瓦	- (7.5)	暗灰～褐色 褐色 橙～黄褐色	緻密/やや多い/8(1) mm/赤・白(長)・チ (灰色)	・ナデ ・春日庄痕	軟 やや劣	-	-	B-2区出土、 二次加熱を受け 変色
				127	皿	- (2.6) (4.4)	淡黄白褐色 淡黄白褐色 灰褐色	緻密/少し/2(1)mm/ チ(灰色)・石・長	・不明 ・不明	やや軟 劣	-	1/7	B-2区出土
				128	円筒	- (5.0)	灰褐色～淡褐色 灰褐色～淡褐色 淡褐色	やや粗/少し/3(1) mm/赤・石・チ(灰色)	・ナデか ・不明	硬劣	-	-	B-1区出土
				129	土製品 ふいご 羽口	(長5.8) (幅4.3) (厚2.0)	暗紫灰～褐色 暗紫灰～暗褐色 橙褐色～灰褐色	粗/多い/5(1)mm/ 石・長・チ(灰色)	・ナデ ・ナデ	硬劣	-	-	B-2区出土、 二次加熱を受け 外面は黒炭、内 面は赤変
130	石製品 (銅片)	(長2.7) (幅3.6) (厚3.4)	暗灰色 暗褐色 暗灰色	-/-/-/-	・- ・-	- やや劣	-	-	B-1区出土、 2箇所にリタツ チあり				
B11・2区古墳後期包含層				131	軒蓋	13.4 4.2	青灰色 青灰～暗青灰色 青灰色	やや粗/やや多い/3(1) mm/白(石)・長・黒	・回転ナデ、回転ヘラケ ズリ ・回転ナデ、ナデ	やや軟 良	3/4 -	B-2区出土、 外面の大部分は自 然釉で暗灰色化	
				132	杯	- (2.46)	暗青灰色 灰褐色 暗青灰色	緻密/少し/1(0.5) mm/白(長)	・回転ナデ、回転ヘラケ ズリ ・回転ナデ	硬良	1/8	B-2区出土	
				133	杯	(13.9) (3.6)	灰色 淡灰色 淡灰色	緻密/少し/3(1)mm/ 白(石)・長・黒・チ (灰色)	・回転ナデ、回転ヘラケ ズリ ・回転ナデ、ナデ	やや軟 良	1/6	B-1区出土	
				134	杯	(14.4) (3.6)	淡灰色 淡灰色 淡灰色	やや粗/少し/3(1) mm/白(石)・長・黒	・回転ナデ、回転ヘラケ ズリ ・回転ナデ、ナデ	硬良	1/5	B-1区出土、 外面の一部は自 然釉で暗灰色化	
				135	杯	(10.4) (3.7)	青灰色 青灰色 青灰色	緻密/少し/3(1)mm/ 白(長)・石・黒	・回転ナデ、回転ヘラケ ズリ ・回転ナデ	硬良	極小 -	B-1区出土、 外面の一部は自 然釉で黒色化	
				136	高杯	- (2.7)	青灰色 青灰色 淡青灰色	やや粗/少し/4(1) mm/白(石)・長・黒	・回転ナデ ・回転ナデ、回転ナデ	硬良	-	-	B-2区出土
				137	高杯	- (7.1) (13.8)	暗緑褐色 淡紫白褐色 淡紫白褐色	やや粗/やや多い/3(1) mm/黒(多)・白(長)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	-	極小	B-2区出土、 外面の一部と外 面は自然釉で暗 緑褐色化

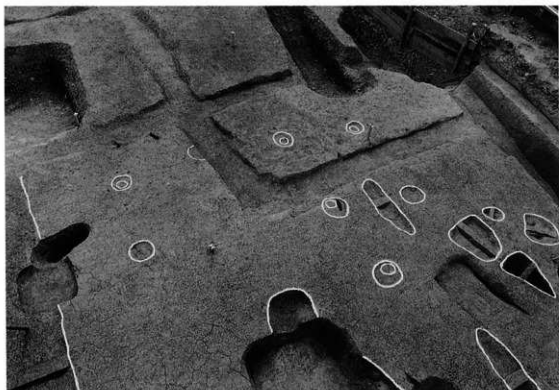
調査年度	遺物種類	器種	法量:cm (二重定、 口径 口径 底脚径)	色調		胎土 素質/胎物の量/ 胎物の粒径(%)/ 胎物の種類(※※)	調整・手法 (※※※) ・外 ・内	焼成 硬度	胎度	備考		
				外 表面	内 表面							
B11・2区 古墳後期包含層	須恵器	138 高杯	— (8.0) —	暗灰色 淡茶褐色 暗青灰色	外表面 内表面	やや粗/やや多い/4(1) mm/白(石・長)・赤 ・黒	・回転ナデ ・回転ナデ、しぼり目	硬良	—	B-1区出土、 外面は自然釉で 暗灰色化		
		139 高杯	— (7.9) —	暗灰色 淡青灰色 淡青灰色	外表面 内表面	やや粗/少し/2(1) mm/黒・白(石・長)	・回転ナデ ・しぼり目	硬良	—	B-1区出土、 外面は自然釉で 暗灰色化		
		140 高杯	— (7.6) —	淡紫灰色 灰紫色 淡灰色	外表面 内表面	緻密/少し/2(0.5) mm/白(長)・黒	・カキメ ・回転ナデ、しぼり目	硬良	—	B-2区出土、 外面の一部は自 然釉で灰紫色化		
		141 高杯	— (3.4) [12.0]	灰色 灰色 灰色	外表面 内表面	やや粗/少し/4(0.5) mm/白(石・長)・黒 ・ナ(灰色)	・カキメ、回転ナデ ・回転ナデ	やや軟良	1/8	B-1区出土、 外面は自然釉の 可能性もあり		
		142 高杯	— 3.5 [14.4]	暗灰色 暗青灰色 暗青灰色	外表面 内表面	やや粗/少し/3(0.5) mm/白(長・石)	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬良	1/5	B-1区出土、 外面は自然釉で 黒灰色化		
		143 甌	— (4.2) —	黒灰色 暗灰色 暗灰色	外表面 内表面	緻密/少し/1(0.5) mm/白(長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	—	B-2区出土、 外面は自然釉で 黒灰色化		
		144 甌	— 3.4 —	暗灰色 淡茶褐色 青灰色	外表面 内表面	緻密/少し/3()mm/ 白(長・石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	—	B-1区出土、 外面は黄褐色自 然釉付着		
		145 壺蓋	[10.6] [4.2] —	暗青灰色 茶褐色 淡青灰色	外表面 内表面	緻密/少し/2()mm/ 白(石)	・回転ナデ、回転ヘラケ ズリ ・回転ナデ	硬良	1/5	B-2区出土		
		146 直口壺	[9.3] [5.5] —	暗青灰色 灰紫色 青灰色	外表面 内表面	緻密/少し/2(0.5) mm/白(長・石)・赤	・カキメ ・回転ナデ	硬良	1/4	B-2区出土		
		147 甌	— (4.1) —	淡青灰色 淡青灰～暗灰色 暗灰色	外表面 内表面	緻密/やや多い/4(1) mm/白(長・石)・黒 ・赤	・回転ナデか ・回転ナデか	硬 やや劣	—	細小 B-1区出土、 内外面に暗茶褐 色自然釉付着		
		148 甌	— (1.7) 4.7	淡黄褐色 淡黄褐色 淡黄褐色～灰色	外表面 内表面	やや粗/少し/3(1) mm/石・ナ(灰色)・長	・ナデか ・不明	やや軟劣	1/2	B-1区出土、 外面の一部は二 次加熱を受け茶 色		
		石製品	149 有茎尖頭器	(長4.7) (幅2.5) (厚0.6) (重5.9g)	暗灰色 漆黒色 暗灰色	外表面 内表面	—/—/—	— —	— やや劣	— —	B-1区出土	
			150 (銅片)	(長3.8) (幅3.2) (厚0.8)	濃灰色 暗灰色 濃灰色	外表面 内表面	—/—/—	— —	— やや劣	— —	B-2区出土	
		B11・2区 その他	土師器 須恵器	151 甌	[15.2] (6.1) —	暗褐色 赤褐色 黒色	外表面 内表面	やや粗/多い/3(1) mm/石(多)・長・赤	・ナデ、ヨコナデか ・ヨコナデ、ヘラケズリ	やや軟 やや劣	1/5	B-1区出土、 外面に煤付着
				152 杯蓋	[12.6] (3.1) —	暗灰青色 暗灰青～淡褐 淡褐色	外表面 内表面	緻密/少し/1(3.5) mm/白(長)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	—	細小 B-1区出土、 外面の一部は灰 褐色自然釉付着
				153 杯口	— (2.4) [10.3]	暗青灰色 暗青灰色 暗青灰色	外表面 内表面	やや粗/少し/3(0.5) mm/黒・白(長)	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬良	1/8	B-2区出土
				154 (脚台)	— 3.0 —	灰色 灰色 灰色	外表面 内表面	やや粗/少し/3(0.5) mm/白(長・石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	やや軟良	—	細小 B-1区出土
155 筒	— (2.2) 4.2			淡赤褐色 灰白色 青緑色	外表面 内表面	緻密/ほとんどなし/ 0.5mm/白	・ナデ、ミガキ ・ナデ、ミガキ	硬良	1/2	B-1区出土、 内外面に青緑色 の胎釉		

色調、調整・手法欄において、平瓦では、外面は凹面を
内面は凸面を指し、丸瓦ではその逆。

圖 版



(1) 1992年度調査地全景(東から)



(2) 2-OB(北から)



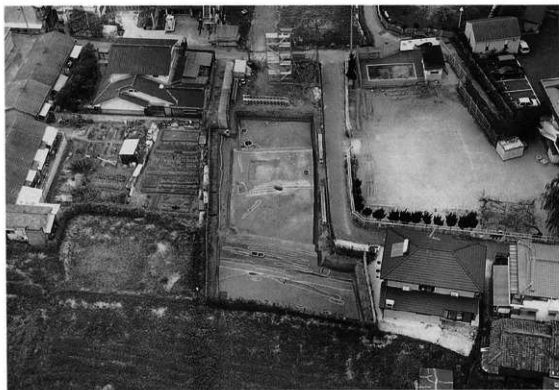
(1) 1993年度調査地全景 (航空写真・東から)



(2) 1993年度調査地全景 (航空写真・北から)



(1) A-1区全景 (航空写真・北から)



(2) A-1区全景 (航空写真・東から)



(1) A-1区全景(西から)



(2) A-2区全景(東から)



(1) B-1区全景 (航空写真・東から)



(2) B-1区全景 (西から)



(1) B-2区全景 (航空写真・北から)



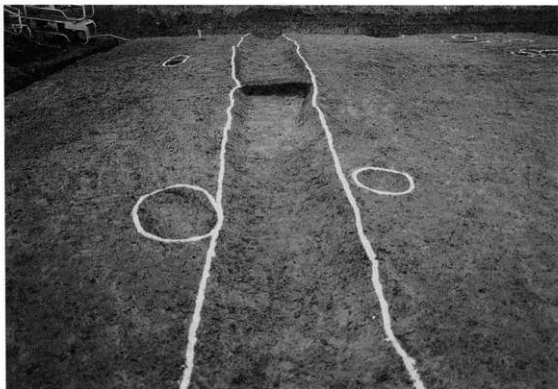
(2) B-2区全景 (東から)



(1) A-1区：小溝群18～26-OS（南南西から）



(2) A-1区：土坑33-00（西から）



(1) A-2区：溝42-OS（北から）



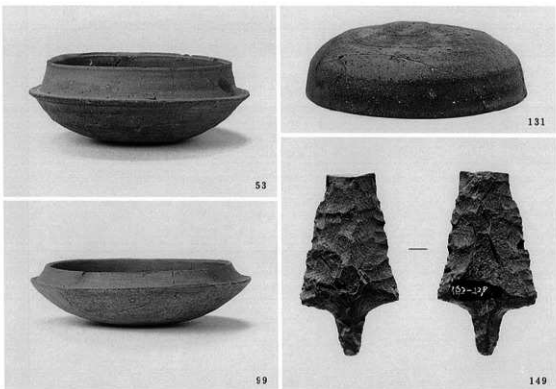
(2) B-1区：溝53-OSほか（南から）



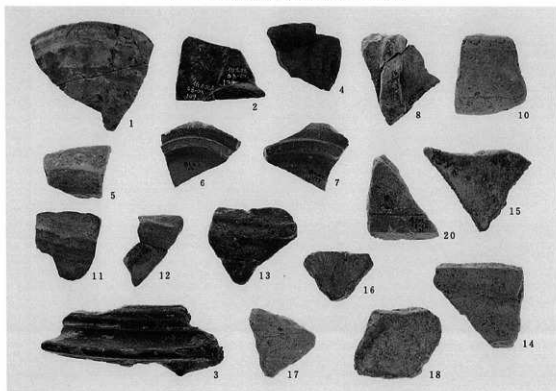
(1) B-2区：土坑群134・141・146-OOほか（西から）



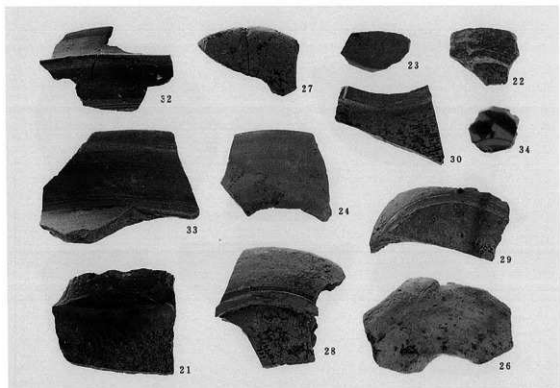
(2) B-2区：土坑群118～122・131-OOほか（南東から）



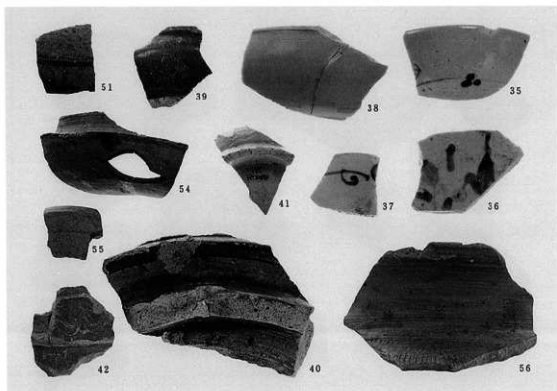
(1) 遺構・包含層出土遺物 53-OS (53) B-1・2区中世包含層 (99)
B-1・2区古墳後期包含層 (131・149)



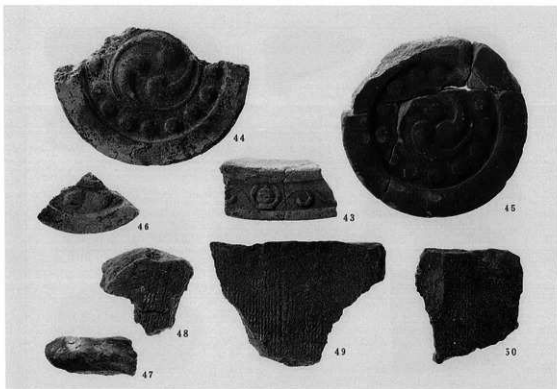
(2) 遺構出土遺物-1 21-OP・17-OB (1) 8-OX (2~8・10~18・20)



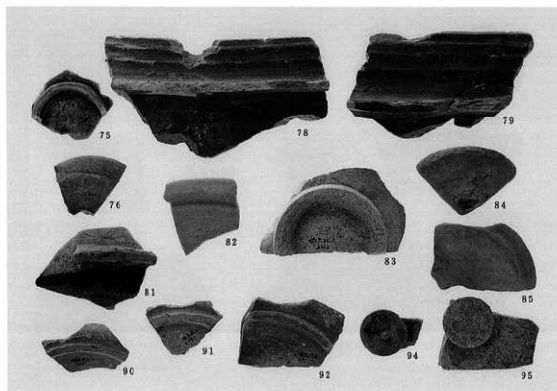
(1) 遺構出土遺物-2 22-OS (21) 1-OS (22・23) 07-OS (24)
33-OO (26~30) 51-OX (32~34)



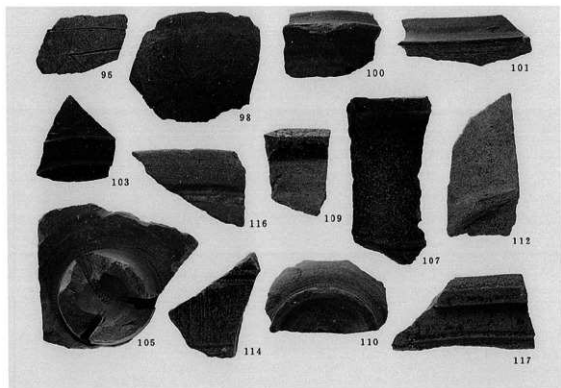
(2) 遺構出土遺物-3 50-OS (35~42) 53-OS (51・54・55) 118-OO (56)



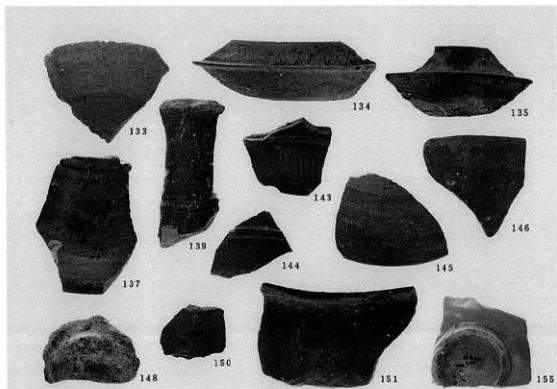
(1) 遺構出土遺物-4 50-OS



(2) 包含層出土遺物-1 B-1・2区中世包含層



(1) 包含層出土遺物-2 B-1・2区中世包含層



(2) 包含層・その他出土遺物 B-1・2区古墳後期包含層(133~135・137・139・143~146・148・150) B-1・2区その他(151・155)

報 告 書 抄 録

ふりがな	はかたきたいせき							
書名	伯太北遺跡							
副書名	都市計画道路池上下宮線建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第64集							
編著者名	胸井正明・秋山浩三							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL.0722-99-8791							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
はかたきたいせき 伯太北遺跡	おおきかふ 大阪府 いづみし 和泉市 はかたちょう 伯太町	27219	27	35度 59分 54秒	135度 59分 58秒	19920624～ 19920925	850	都市計画道路 池上下宮線 建設に伴う 事前調査
						19930927～ 19940131		
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
伯太北遺跡	集 落	古墳時代 後期	溝、土坑	須恵器、土師器				
	集 落	平安時代 初頭	掘立柱建物、溝	土師器				
	集 落	中世	掘立柱建物、溝	瓦器				
	耕作地	中世	溝、段状遺構	陶磁器、瓦器				

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第64集

伯太北遺跡

都市計画道路池上下宮線建設に伴う発掘調査報告書

刊行日 2001. 3.

発行所 財団法人 大阪府文化財調査研究センター
〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号
TEL(0722)99-8791

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号